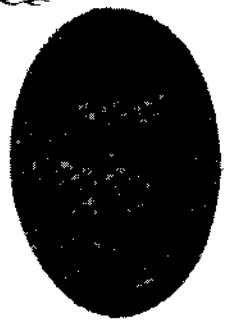
巻頭言

スプリング発行に寄せて



会長　金田博志

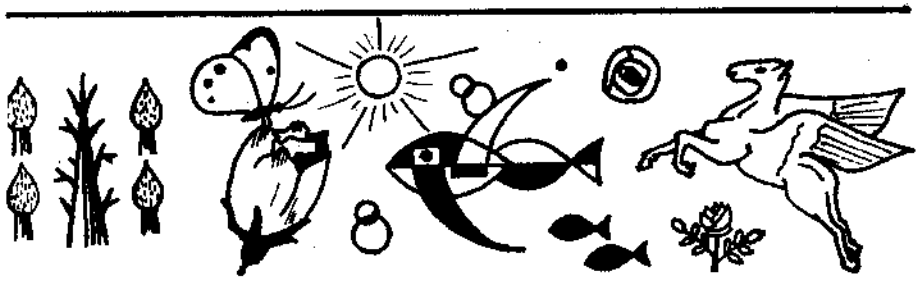
無から有は生じ得ない。自治会も生徒の皆さんの、関心と協力を得ずしては、有り得ないのです。

我々の自治会は、その本来の姿を失いつつあります。それには種々の理由があげられますが、結局その傾向を修正できるのは、自治会を組織する生徒の皆さん以外の何ものでもないのです。

スプリング編集委員会の努力が実つて、できたこのスプリングが、皆さんの自治会への関心をあおる事ができましたなら、私と致しましても、この上ないしあわせです。

自治会活動の一片の結晶を、心ゆくまでも、味わい、自治会に対する心の持ち方を新たにして下さい。

写真説明
上　座談会の模様
左中　[illegible]
左下　中南[illegible]
下　[illegible]



：スプリング　第三号　もくじ：

文化祭アレコレ反省記……35

◎校長先生
◎山本春樹
◎佐伯守康
◎平先生
◎三好健司
◎打越裕子
◎地歴部
◎アンケートより

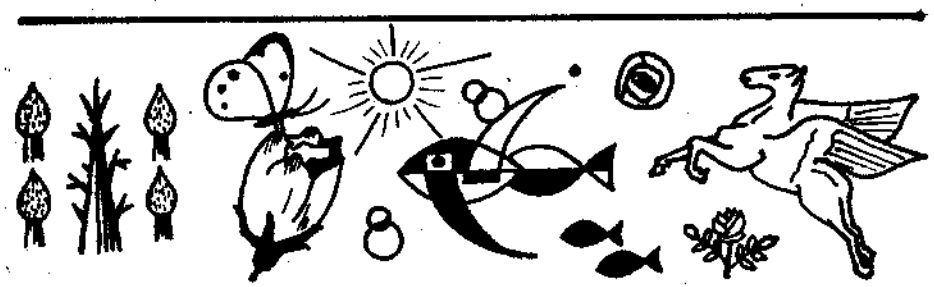
大手前回顧録

想出話……岸上恭平……62
回顧……杉野としゑ……63
無題……下村米太郎……65

文芸

詩……上田修也……15
詩……加島文……68
詩……金田博志……70
詩……哀怒喜楽……33
詩……加島文……20
創作……成瀬英一……62
創作……山本春樹……78
その他

座談会　大手前の印象と抱負
（校長をかこんで）……4



アンケートから見た大手前……23

フォークダンスと歌声……23
大手前生の生活白書……25
自治会をさぐる……30

先輩を訪ねて

京大理論物理研究室で……46
ヨーロッパ旅行……48
東住吉高校へ……51

あ・ら・かると

ルゲンワの旅……村上輝康……4
死について……砂田長一……25
地歴の紹介……地歴研究部……57
黒大だけが知っていた・津生志質造……41
珍・女の一生……小路実……77

転載

幼年……神保光太郎……73
雲……44
無責任航海記……伊加礼太……80
Aの日記から見る……吉村正……38
或る教訓……水島竜彦……78
演劇部内幕……演劇部……57
歴代自治会会長の顔ぶれ……68
独唱……53
存在……82

巻頭言……会長……1

フォート
編集後記……87

大手前の印象と抱負

座談会

校長を囲んで

二十五年間の大手前生活を終えて出て行かれた佐藤先生に代わつて今年から国友校長が赴任されましたが、この新しい環境に対する校長の印象や抱負又我々の先生に対する印象や質問等を話し合つてみたいと思います。

特にこの大手前をよりよく発展させるには前途に色々と問題が横たわつております。例えば、全定併設の問題、先生と生徒との意志の疎通、校舎並びに運動場に関する問題等々である。国友校長はこれらの事に関してどう考えておいでか、又高校生というものについての認識の有り方、その他多くの事を国友校長を囲んで話し合つて行きたいと思います。

よく勉強する大手前生

司会　校長先生のこの学校の印象を一言。

校長　どういう印象と云われても云い難いのですが、僕がここに来ることになつたのは突然の事なんです。そう三月三十一日で前日に知つたのです。一番感じたのはとも角大手前の生徒は非常によく勉強するし又非常によく出きる。ここへ来る前に寝屋川の或る先生に大手前生の知能指数が一七〇位云われたんですが僕は一三〇位かと思います。とに角よく勉強する。殊に女生徒は四～五時間位しか寝ないのだから恐ろしいと北野時代から聞いておつた。北野の生徒がそう云うのだから相当のものだと思いました。事実来てみてうそではないということは分つたが一番違つているのは、案外朗らかということです。殊に生徒総会に先生が出てこいというのには面喰らつた。他校ではそんなことはないし、いくとしても顧問位なものですけど、校長が

出てこんとはけしからんと後で聞いたんですが、自治会は大したもんだと思いました。総会には既に三回出ました。自治会の活動文化祭のやり方自治会祭等見ても活発である。世間では勉強の為そんな活動は余りないのではないかというように聞いていたが来てみて必ずしもそうではないと思つた。仲々手ごわいという感じが今のところしてます。外部的にクラブ活動がそう活発でないと聞いていたんですが、全般的に見て、或る程度高校生活というものをエンジョイしていると思われる面が多分にある。毎朝欠かさず出席を取るのは近頃の高校として珍らしい様な気がした。中学時代にどつちかいうと指導的立場におつた人が多い、けれどそういう人も多く集まると好ましからぬ現象も出てきますね。社会的現象のように認められているのですからね。若い人が集まればこういうものですね。何も大手前生といつて特別扱いする必要はない。まとめれば意外に活発で又明るいことです。

加島　先生は社会科、前校長は英語なんですが何となくそんな気てします。

校長　社会の本当の学問をした人とは限りませんね。社会科やつていると社会科のタイプになるんでしょうね。

加島　大手前生は優秀な人とよく云われますが、感受性が強いので直ぐにエキサイトするのと違いますか。

校長　中学時代に良くできたというだけだから、必ずしも一個の人間として人間生活を営なんでいくとに全体として優秀であるとは断言できません。素質のある人が大体優れた人格を持ち合わせているようですね。しかし素質のある人でも同じ様な人の中で何かうまく行かないと劣等感の為折角の才能を伸ばすことができない場合がありますね。それが人柄の上にもでてきますね。たくさんの

人が集まると立派な人許りでも好ましくないことも起りますが止むを得ませんね。群集心理という言葉で割り切れないところがありますね。

人気のある歩き方

司会　次に援長先生への印象等を皆さん方から。

加島　歩き方に人気がありますよ。

校長　歩くことが好きなんです。時間が許せば車より歩く方を撰びます。乗物に乗るより道草くう方がいいですね。人間がそうできているから…　歩くのもジグザグ型に歩きますね。急いだら早いんですよ。中学時代通学で誰よりも早かつた…今でも。町で青信号に変りそうな時に車道を渡る人を見かけるが十秒も早くないのに…そんな人の気持が分らない。そんな人に限つて青信号の時にボーッとしているものです。歩いている時の方が物事を思い出すのにいいですよ。家を出る時に家内が忘れ物はないかと聞くんですが家を出て少ししてから取りに帰ることが多いいつも家内が笑うんですがね。

大きなミス

下貞　先生は本当にきさくな感じがしますね。話しやすい感じです。

校長　実は僕が教師になつたきつかけが変わつているんですがね。中学時代（北野）なんですが教師を大事にしなかつた。先生をバカにする。ここもそうと違うか。どつちかいうとボンボンみたいなのが集まつていたのですがね。殊に僕の時に大人しい少尉の人がいたんですがそれなんか「貧少貧少」と言つてやかましい程やつたが同じ人間なのに馬鹿な事をすると思つた。卒業の時に父（教師）に教師になれと云われた。死んでもならないと云いましたけど、その内高校の途中で父が死んだんですが、不景気で普通の就職口もなかろうと思つてやむなく教師になつたんです。校長にはなるまいと思つていたんですがね…。　まあ何かの間違いと思つています。突然大手前に来ることを知つて身体の調子が悪くなりました。来てみて面倒な事もあるし今でも僕には重荷だと感じていますね。出来るだけやりたいという気持はある。校長らしくない校長という所ですね。

金田　先生がお出でになつた時先生の話が長くなると聞いたんで、覚悟していたんですがね。

話嫌いの校長

校長　大体話をするのは嫌いなんです。本当の所辛いし何べんやつても慣れなくて、話し出すと自然に後が出てきますが、早くこんな仕事は止めたいですよ。

加島　先生がいつも話される時はよく社会状勢の事を出されるんですが……

校長　「社会状勢」なんてそんな所まで行きませんよ。例に少し挙げる位のもので…　特別に印象や興味を覚えたものに対して考えてみることはあるかも知れない。

打越　先生の態度を伺つていて低姿勢でやつておられるような気がしますがその点特に注意を払われているのですか

校長　特別に姿勢という訳ではない。

打越　移つてこられて特別に注意をもつておられるようなことはありませんか。

校長　そういう点はありません。

司会　それではこの学校が自由といわれている点についてはどうでしようか。

校長　生野・北野・寝屋川・大手前位しか知らないのだから比較するのは無理です。

加島　他校と比較して考えてものをやられる時はありますか。

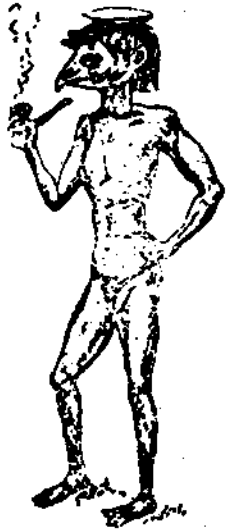
校長　考えることもあります。

加島　先生が他校とか周りのことを気にしてものをやられるよりは、今迄の大手前の伝統とか気風とかをもつと知つてもらえればと思います。

校長　その大手前の気風というものがまだ分つていないんですがやはりこの学校の従来の気風を保ちたいと思つていますね。けれど一応責任もあることだし「これは」という点があれば「考えたい」と云わざるを得ませんね。文化祭もここのは初めてですし、その準備なんかもまつたく知らないんで較べようがない。感心したのは授業に影響を及ぼさずにその準備をしたにもかかわらず、展示物なんかも内容が多いということです。始つて二、三時間で撤去するのは惜しい気がしました。

金田　大手前生と寝屋川生の間に人間性の違いなんかありますか。

校長　こつちの方が元気があり寝屋川は田舎者のような気がします。それ以外の事は簡単に云えない。



自分自身の才能を伸ばせ

司会　校長先生が大手前生にこれから望まれることは？

校長　生徒自身が自分で自分の希望をやつているのですから何を云つてもしかたないんですが、強いて云えば頭のいいやつには要領のいいやつが多いというんですが、要領のいいやつに「悪くなれ」とは云えないそれはそれで取得があるしね。自分のことだけ考えずに社会に役立つことはやる。人間と生まれたからには或る程度の才能があるなら折角こういう環境にある以上それを伸ばすように努力し社会に役立つ人間になることが一つ、それから大きな社会の中ではどんなに優れた人間でも自分の意志ではどうにもならないんですが矢張一人一人が努力して自分の意志をなんとかして難しい社会に通そうとする意欲は必要ですね。それで自分の能力のないこととか自分が無責任なことを知り乍ら色々な問題を社会の罪にもつていく傾向にあつて自分自身をかえりみない様だが、そういう点で少なくとも大手前生であるならそう簡単に流行になつたような見方に押し流されずに自分自身を鍛え上げていく努力をして欲しい。そして自分に与えられた才能を伸ばす可きである。その結果立身出世することもあるが、自分自身の才能を伸ばすだけ伸ばしたということに満足する可きですね。選ばれた才能ですから伸ばすのはいいのですが、金もうけの様な気ではなくて自分が本当に好きなものに全力を尽くせば自ずから自分自身にもいいし社会にもプラスになると思う。だからそういう自分の好きな事に意欲を持つて欲しい。意欲は誰でも持つているんですが、一層そういう点で自分自身だけでなく人の役に立つような仕事をする気があれば多少今日の社会が複雑であつてもそれに押し流されるような気持は薄らぐと思います。

加藤　現在大手前高校は優秀校の先端を切つていると云われているんですが、一端中へ入つてみると高度なものをしているし又授業の進め方も上位の人に重きをおいておられるようですが、それについていけない人は自分の才能を伸ばし切れないのではないかと思います。ですからそういう点先生の考えをお聞きしたい。今後どの様な方針で我々が授業をやつていけばという点で何か。

校長　そういう要望があればやつていく可きであるが、大手前生は事実よくできるので、先生方もより伸

ばすねにしりをたたいてとられたのではないですか。それが一部に犠牲があり大手前へ来て駄目だということになると考える可き問題である。

加島　先生の間でも生徒に大手前生は八時間勉強するんだと勉強を強いるタイプの先生もあるし、又現代的というのか生徒の気持を判つた様な教え方をされる先生もおられるんですがね。その辺に先生間の矛盾がある様な気がする。

校長　勉強の仕方とか時間は各人各様であるから学校で方針を立てることは無理である。先生にも各々体験があるし、学科によつて違うから言うのに違いがあるのは無理ないのではないか。

加島　先生の間にも自分かつてな事いう様な先生もいますし、先生というものを只職業的に考えておられるような先生があつて、自分の勤務成績を大学の進学率を引き合いに出す先生もある。そういう先生が多い様な気がする。

校長　進学一途にやつている人には生徒諸君にそう映る面もあるかも知れないが、どこでも若い人から見るとそう映るんでしようね。ひどいのになると「東京か京都か行かなん阿呆や」という様な例もありますがね君達面白いのではないか。先生がそういつたからといつて、気にする必要はないんではないかと思います。

先生と生徒の意志疎通は？

山本　僕はこの学校に入学して先生と同じ位なんですがね。最初に感じたことは生徒と先生の対立が激しいことです。中学の時から聞いてはいたんですが、この学校では何かあつたら先生を攻げきしたらいいという風潮があるように思う。文化祭の反省会でもそういう風潮が基礎にあつたと思うんです。ですから先生と生徒の話し合いの機会を一ヵ月に一回位話し合い又は先生と生徒の集いを持つて欲しい。

校長　先生と生徒との対立とは大げさですが、こういうことはどこでも云つていますね。中学の時と較べれば親近感は薄いですね。我々はそ

加島　ただ校長先生が職員の中にそういうふん囲気を作つてもらえたらと思います。

校長　まあ相談してみます。従来ここまで作つてきた学校は全国でも余りないと思います。その点で従来このやり方で成功してきたんですからね。

ういう係の先生を通して一応話し合いはできていると思うんですがね。HRの在り方も考えねばならないと思いますね。学問的な意見ならとも、かく感情的な対立があつて学校が成立しているというのは、又そうであつても、第一歩から間違つている。お互いに同じ立場で意見は対立しても話し合いをしていく、学校というのはある意味で家庭の延長だと思う。持ち込むことは難かしいが残したいという気がする。こういう点考える必要があると思います。

加島　その対立も一部の先生に片寄り過ぎているのではないですか。他の先生は無責任過ぎる感じがする生徒の方にもそんな気がする。

校長　どこの学校にもそういう印象は共通していますね。

下貞　先生が授業されては如何ですか。生徒の気風を知るのにもいいと思うんですが。

校長　もう少し慣れる迄ね。しばらく授業から離れているからうまくいくかどうか多少心配です。

金田　話し合いの会を持ちたいですね。先生と生徒の間のこういつた壁を取り除いて欲しいと思います。

校長　諸君はそう言い乍ら中学の時にはそうやなしに高校へ来たら先生から離れようという気持は一面にありますね。君等がそういう年令です。ソクラテスの時もそうであつたソクラテスが来ると若い者がすつと横へよけたというんですからね。そして一方では「教師は冷淡である」ということは世界中、古今東西みなそうである。

全定併設のなやみ

加島　大手前では全日制も定時制も通信教育も同居していますが、それによつて色々な弊害がでてきますがその点についてどうお考えですか。

校長　この三つをうまく調和させていくのに非常に難かしい点がありましてね。諸君にも非常に迷惑をかけている点もある。そういつて全日制が主で定時制が従だというようなことは言えませんし、定日併校の校長は常に機会ある毎に当局の方へ言つているのですが、独立校にして呉れとね。独立校になつている県もありますが、大阪は今の学区制と生徒の急増の問題が済んだらその準備にとりかかると思います。定時制の生徒は学校が非常に楽しみなんですね。そういう点君等と違つているね。

加藤　先生の信念とか性質が大手前生に影響するのが好ましいと考えられますか。

校長　好ましいとは言えない。社会というもので生きる以上は社会を害さないで、しかも自分自身が損害を受けないような生き方は共通した事で、僕等から見て、こうある可きではないかという事は矢張お願いしたいと思いますね。

加島　僕の考えは学校を緑にと言うよりも、もつとダイナミックな感じにして欲しい。今の様では何か箱庭で女の子が遊んでいるように思います。校舎でもあんな隅つこに建てたりせずに（註、校務員室の前に建てたものを指す）もつと他に建て方があつた様に思う。

校長　あそこへ持つて行くのは色々問題があつたんですが、もう仕方なしにあそこへ押し込められたのでね。

金田　便所の二階は。

校長　少しでも大きい空地を狭くしないという事と他の風紀を害さないという様な事であそこへ押し込めたんですが、実際残念だと思う。

金田　その便所の上使えるのではないかという気がしますが。

校長　僕もそれを云つているんですが、専門家に聞いて見ないと解りませんね。初めに作る時に二階にしてもらえないのかと半分にしてもいいからと言つたんですが、出来ないのですね。役所仕事でこんなものですね。補修という意味でするのだから補修は原型でやらねばならないとね。実際金銭上の問題だけではないのです。上は何とか利用せねばなりません。

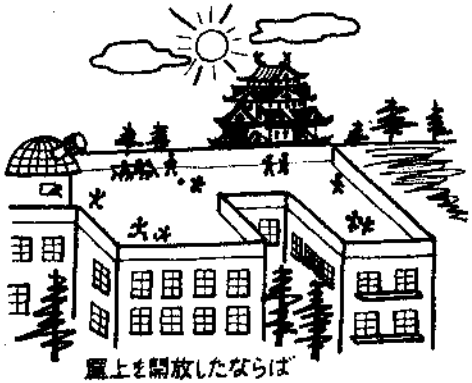
屋上の開放!!

金田　大手前でも屋上を開放したらどうでしょうか。

校長　そういう点考えますけど、危険でもあるし、それに屋上に上ると雨漏りの原因となるからね。この建築は案外頼りないですね。屋上を使つている所は余程運動場のない所ですね。しかし男の子というのは君等の年頃になつても意外な事をしていますからね。屋上のあの周囲の上を歩くやつがおるのだからね（笑）市岡で不幸な事件がありましたしね。五、六年前に二回続いて屋上から飛び降りて死んだ人もありますしね。そういう誘惑を感じる人がないとは云えないし、それで学校でもできるだけ閉めているのですがね。

下貞　廊下歩いたらね音がするでしょう。そのような所改良して欲しいと思います。

校長　ぼつぼつそういう所は直します。



屋上を開放したならば

高校生の考え方について

打越　私達の目的が大学以外にないような考えが皆の間にあり、そういう指導のされ方をするし、家でもやかましいということになつて、却つてそれについて行かれないような時々矛盾した気持を持つんですが、そういうことに対して何か精神的な指導を考えておられますか。

校長　色々難しい事がありますしその指導という問題で講演してみたところで簡単に解決するものではないし、話を聞いてみようという計画はないこともないのですが、まあ大学へ入ろうという気持は殆んどみんなの人が持つているのですがむしろその気持があつて当り前の事だと思いますがね。

打越　矢張り一人でも多く良い大学へ入れようという意識は持つておられますか。（笑）

校長　そんな事は云えないが、受験生が希望む所へ行くのが幸福だからね。そういう意味で云つている訳で学校の宣伝という事ではなく、そりゃ入らないより入る方がましですけど。

打越　そういう風な受験生の持つ悩みは。

校長　これは社会的な問題です。ここはそういう点で殆んどの人がそういう気持で入つて来ますからまだいいのではないですか。家の者がそういう点で強く関心を持つている方などは多少辛いでしようが、父兄にしてみると、自分は行けなかつたが子供には行かしてやりたいと、これは人間の共通した希望なんですね。人間はこれで進歩して来たんですからね。猿の世界にはそういうことはないんです（笑）これは余り悪く言えないと思いますね。方法については多少問題がありますが、母親が子供を何とかしてやろうという気持は善意に解釈す可きもんですね。まあ子供は子供で適当にやつておればいいと思います。

打越　さつき学校の対立とか講とかいう話が出ましたが、自治会とか総会とかがしばしば急進的になつたり、色々思想的な面で先生の方から健全ではないというような話を聞きましたがその点どのような指導を考えておられますか。

校長　一番難しい問題ですけどね。思想というのは自由です。それはそれでいいけれども急進的であるかないかということについて、これは改革主義とか進歩主義ということなんですが、生徒自身の本当に心からそういう気持で言うているのなら、ある程度お互いに話し合うてやる可きだと思います。現代の急進的な人の意見は政治的に限らず何か背後にあるような気がするんです。そこに僕はいやな物があると思うんです。そりゃ思想をたどつていつたら何か背後にあるに違いないけど、本当に自分の信念で言うておるのか、人に言わされているのかということです。一種の流行ですね。そういう所に少し遺憾な点があります。思想は自由だが実際の行動になると、学校全体の幸福ということを考えねばならない。

牧野　その背後にあるものというのは年令的なものですか。

校長　そうではない。政治なんかで日本人であり乍らソ連の代表者みたいな意見を平気で云うものもおるし又日本の悪いことばかり云う人もおります。文化人でもね。僕はそれが心外なんです。リバイバルみたいな愛国心は嫌いです。日本人が日本人を悪く云うのはいやですね。日本の歴史は間違つているなんてね。ひどいのになると奈良朝の文化は労働者の犠牲の上に作られたと云うのがおる阿呆なことを云うと思うね。しかしその時はその時でそういうものを作る一つの国民的な矢張り共通の理念があつたと思うんです。しかもできたものが実に立派なものですからね。本当に日本人自身をそんなに悪く見なければならないものかという気がします。

牧野　今指摘されましたように過激な思想を持つている人の状態を或る一種の流行の様なものではないか云われたんですが、先生が今言われたことも一つの流行と指摘できます。何故ならば、朝礼等で「ま、しかし」

という言葉がよくでるんですが「ま」という言葉は「しかし」という言葉を或る程度弱める効果の為にはさまれるんだと思います。先生は謙遜ということでつけられていると思うんですが、何か人との会話に於て衝突を避けるのではないかと思いますこれは妥協とか中庸とか折衷という言葉に結びつくし、又その妥協という言葉はさつき云われた様な社会に於て自分の能力の足りなさがあるにも関わらず、社会が悪いという方向に持つて行く人を攻げきされましたがその内に、先生は社会的に言つて自分が悪くなつたということは仕方がないことで、長いものにまかれるとか日本伝来の思想があるのだから一つの過激な考えは流行であるからそれにまかれるなといわれた様に思いますが、その様な事が流行であると指摘できます。

校長　君の見方からは、そういうことが言えるかも知れませんが、業

は流行というものを追うているつもりはないんですけどね。まあ、進んだ思想というものがみんな流行だというのではない。本当にそれを考え出した人もあるのだし、又本当に信じている人もあるのだし、只しかし、そうでない、本当に自分の本当の心でなしに、それに引張られているという意味の流行というものが確かにあると思う。僕が「しかし〃まあ〃とかいうのは次に何言おうかと言葉が出てこない時に自然に出てくることなんですね。僕の話は君のいうように論理的に組み立てているのではないんですよ。

平井　それは単なる癖だと思います。誰でも話しの時には合の言葉があるもんですよ。

司会　最後に趣味の方は如何ですか。

校長　趣味は相当あるのだが、何でも好きです。

酒はアカン!!

金田　食べ物の方では

校長　若い時と違って年が寄ると食欲がなくなるのに味覚が発達するんですね。いい加減なもの喰いになりたくない気持があります。"

加島　お酒は如何ですか。

校長　酒は駄目です。僕は酒がいけたら政治家になったかも知れない（笑）

金田　本などは如何ですか。

校長　若い時には殆んど読まなかった。実際読書は特に好きだとは言えない。最近もう先が短かいなという気がして、折角いい本があるのだから知っていなければと思ってちょいちょい読んでみる。教えられることもありますしね。

金田　スポーツの方はどうですか。

校長　野球は好きです。応援の方は今は巨人位、僕は強いところが勝てばいいという主義です。

金田　相撲の方は

校長　テレビで見る位のものです。

以上

おことわり　紙面の都合上、要約致しましたので、発言者各位の論旨が不分明になった所もあるかと思いますが、紙上を借りてこのことをお詫び申し上げます。

（十一月十七日収録）

出席者
国友校長
三年　打越裕子
二年　加島文・佐竹弘子
一年　加藤敦史・牧野義隆
他本部
司会　下貞孟

秋の日に

文芸部　上田修也

知らない中にここまで来てしまつた
自分が生まれるずつと前のいつか
一人でこの同じ道を歩いたような気がして…

秋は　知らずに歩んできた道を
忘れかけていた美しいものを求めて一人旅ゆく時
銀木犀の香りにひたる時

その日の終り
疲れた旅の果てに静かな湖があつた
忘れられない瞳のように
水は　夕焼と木々の色を映して静かに迎えてくれた

秋風は木立の弦をかきならし
草かげに人知れずみのる小さな紅い実をこぼした
その実は　ほの甘くすつぱく
知らない所でのわびしい夢をぬらした
うすれかけた追想のように

地歴部

どこからでも読め（退屈すればその章飛ばせ）

◎ふるさとの味 ― 詩人の方へ

（スローに感情をこめて）たそがれ―。真赤な夕日が西に傾き、夜の気配が私達の背に迫る頃。家々の窓辺には淡い光が…。工場街は昼の疲れを忘れるかのように深い眠りに落ちる。夕餉のにおいは静かに私達を包み、言い知れぬ郷愁が…「ああ、たまらんなあ。」といつても腹の具合が―お粗末―。さて、確かにそのにおいとは私達の祖先が五、六千年の昔から蓄積してきたものであり、日本民族の歴史はその中に刻まれている。それは心のふるさとの呼びかけである。私達地歴部員は、そのにおいを求めて、数千年のかなたから現代に至るまでの線を追求し、さらに未来のにおいへのつながりとなるべき線を形成しようと日夜努力している。（ええ線行くなあ）即ち、ふるさとのいざないが第二のふるさとへと招いているのだ。

◎生きた研究 ― 見学会

真面目に話を進めよう。一体、最近はレジャー・ブームとかで、日曜、祭日には家におとなしくいる者の方が少ないとか。それも出かける先は、奈良、京都がやはり

アンダンテ・カンタービレ

新しい朝だつた
アポロンの微笑が全てをオレンジ色に輝かせ
その中に　たつた一人のたれかがたたずんで
彼もオレンジ色に染まつていた

やがてあたりは緑にかわり
どこからともなくやつてきたそよ風の
やさしい指が奏でるプラタナスの竪琴
そのあたたかい希望の曲に
たれかは酔いしれることなく
ただ黒い瞳に緑の影を映していただけだつた。

彼女は弾奏をやめていつた
いいえ　聞かなくてもよくわかつているの
あなたの胸の中は一面にうすい水色
その中で　たつた一つの小さい火が静かに燃えている
他には何もないのね
ああ　何て冷たい火なんでしよう
けれど　きつと消えない
さようなら・・・・・・・

最も多いようだ。（国鉄、私鉄はこの時が正月十日）
別に歴史の流れを研究しようなんて大それたことを考えているわけでもなかろうが、自然とそういう成行になる。古都への魅力がそうさせるのであつて、これは民族共通の心であろう。そこに又、においが存在するのだ。だがムード一点張りでは、地歴部員は勤まらない。もつと学問的な見地から、研究する必要がある。教科書や参考書でいかに仏像の美しさを説いた所で、又建築の様式や美について説いた所で、世間一般の理論通り、それは無味乾燥な知識であり、自分の目というものを強く束縛することになる。個人の勝手な意見で歴史が変えられたら大変だが、その美しさまで書物によることは、これ又危険である。我々はこの欠点を補うため、一ヶ月に一度は必ず見学会というものを行なつて、広く教養を身につけると同時に、生きた研究を行なつている。実物を前にして顧問教官、先輩、案内人などと討論する時の楽しさも又格別である。時代に逆行し、過去の現在に存する時、初めてその価値が如実に知られるのである。例えば、一つの仏像が作られる時、おそらく作者はそれに魂を打ち込み、人間の情を加味して完成しただろう。だが、写真はその外形を捕えるのみで、そのメカニズムの理知的な自からは情というものがくみとれない。ここにも一つのギャップがある。

花は　はかない生命を祈りながら
紅く　たそがれに　—
その感情のない微笑にさそわれて
たれかも　いつか静かにほゝえんでいた

夜になつた
紫のベールが全てをおおい始めた
たれかの胸からあふれ出た水色は
やがて紫の中にしみこんでいつた
初夏は満天の星
たれかには　きつとにじんで見えたにちがいない

明日も又、新しい葉は何枚となく生まれ
そよ風はどこからともなくやつてきて・・・・・

宇宙

晩秋のたそがれ時
上を仰ぐと神秘な永遠の世界があつた
そこにただよう星々の
本当はもう消えてしまつたのかもしれない情勢が
赤や青の光となつて　今地上にふりそそぐ

◎ハイキングクラブという別称
私達は自ら、ハイキングクラブと称してきた。これは見学会の時の楽しさの大きな比重が、ともすれば見学会本来の意義を押し気味になるところからきたものだ。がしかし、誤解されては困る。まあ、頭のいい諸君には説明する必要もなかろうが…。誰だい？そこで首をかしげているのは。我々の行く所は大低の場合、山奥か、交通不便な所にある。そして又、我々のふところ具合も北西季節風である。それやこれやの条件より、目的地に着くまでには必然的にハイキングとなる。以上証明終り。
だが、「私達の目的はあくまでも研究にあるのだ。」と青筋立てて論じた所で劉産物のハイキングとしての性格は依然として大きい。（誠に小説は現実より希なりと申しますデス、ハイ）　これは足腰を鍛えることになるから一石二鳥という所で片付けよう。
◎ふところの貧はつれなくも秋の風
見学会に行くとなると費用の問題が気にかかるところだが、現在地歴部では部費から出来る限り援助している近頃では、交通機関の値上がりで頻繁に利用しなければならない私達には誠に辛いところだが、神社仏閣までが拝観料を上げてきた。池田さんの政策で神や仏も動くのだから、日本の内閣の頼もしさ（？）。皮肉つてばかりはおれない。現実問題として、こうも値上がりされたの

耳をすませばきつときこえる
永遠の彼方からひびくこだまが　くり返し　くり返し

青い世界　透明な世界　宇宙

時々思うことがある。
人間の心そのものが宇宙の姿なのかもしれない
それとも　その心が
地上に生まれる前に
彗星のように白い光をひいてさまよつていた所なのか

青い世界　ほの明かるい世界

宇宙が　永遠の時まで永遠であつてほしい
僕の心が無限に羽ばたくように
いつまでも祈りを忘れないように　—

すばらしい光景

一面に紅いのです
僕が溶けこんでしまいそうなくらいに
ちようど落日の時なのでしよう

では個人負担で行くとなると、「ちよつと遠慮しておこうか。」という御仁も出てくるであろう。それを解消するために、部費から援助している。だから、個人としては、一人あたり全費用の半額位で行けるわけだ。我々はこれも研究費の一つとしている。

◎動くクラブ　—　校外活動

私達のクラブは研究内容は地味だが、活動は活発である。中ではもつぱら書物と取り組むが、図書館通いも甚だしい。いわゆる資料集めなるものはここから始まる。資料あつてこその研究であるから、校外活動なしにはやつて行けないと言つても過言ではあるまい。昨年度をみても、淀川水系の研究のため、私達は夏休みの補習期間中、毎日毎日、淀川に関する市町村役場や水道局、貯水池を隅なく訪問し、かなりの資料を集めた。又、五ヵ年計画の服装史は、府下の高校のうち、約三十校ばかりは直接訪問して資料の提供に協力してもらつた。尤も、これは我々の意図するところが、全国初の試みであるから（これは各大学や服装の関係方面へ問い合わせた結果であるからまちがいないものと思う。）現在、その規模の大きさのため、挫折状態にある。この残りの高校は手紙で出して協力を求めた。今年も道路史を研究するにあたり、府庁、府警、道路交団、中之島図書館の間を何度も往復し、又、他の市役所や警察署なども訪問した。この

一面の紅の中に
なだらかな丘だけが
黒く黒くどこまでも続いているのです

その丘の　片方から
一人の男が馬に乗つて
静かにやつてきました

すると
反対側から
一つの馬車が近ずいてきました

男も馬車も
まるで影かなにかのように
黒くくつきりと見えるのです

丘のまん中で
突然男は馬からおりて馬車にかけより
片ひざをついて祈りました

それから男は
再び馬に乗つて
静かに静かに歩みはじめました

ように校外で活動する場合、どうしても外向性が要求される。初めから外向性の人にはお手のものだが、内向性の人も、気がついてみるとある程度外向性を持つているということがわかるようになる。やれば何でもできるものだが、環境の恐ろしさも改めて身にしむ思いがする。

◎活発な活動の陰に

地歴部が盛んに校外において動ける原因は何であろうか。一つには設備の充実が挙げられる。然し、最も重要なことは部員の熱意である。勿論クラブであるから、その研究に熱のこもることは当然であるが、人々は応々にして人の努力を忘れがちである。先にも述べたように、地味な研究であるだけに、その研究に払われた大きな努力、時には犠牲までもが片隅に追いやられてしまう。それでも部員は自分のやつたことに対して満足し、それ以上は望まない。もしそれ以上を望むならば、その者は当然、我がクラブに住めなくなつて去つて行く。が、それでよい。クラブとはそんな者の集まりではない。我々はあくまで、表面の地味の下に存しているのである。

さて、裏面の華やかな活動、校外活動を行なう時にも問題になるのが費用である。できる限り、部費で援助したいが、そんなことをすれば完全に赤字になるので、今のところ、半額負担とし、時によつて個人全額負担としている。この点は誠に不都合と呼ぶべきものであるが、

一面に紅いのです
僕が溶けこんでしまいそうなくらいに
ちょうど落日の時なのでしょう

やがて
影のような男と馬車が
丘の上から消え去つてゆくと

あとには
一面の紅の中に　なだらかな丘だけが
黒く黒くどこまでも続いているばかりです

ある日の君

文芸部　加島　文

予算では交通費一切を認めずとあるから仕方がない。

◎ユーモアと人間形成

クラブにはいることの意義を今更説くわけでもないが我々が部室へはいつて第一に気づくことは、機知に富んでいることである。上品なユーモア程人間を親しみあるものとし、心を豊かにするものはない。よく地歴部は先輩とのつながりが深いと言われる。私達もこれ程先輩諸氏と親密なクラブは他に例をみないであろうと思つている。これは内部組織にもよるが、ここではその原因について触れないことにしよう。このような先輩との交わりは、非常に広範囲となり、私達の人間形成に役立つ。彼等が全部が全部品行方正であるからではない。彼等は幅広い社会人だからである。結局クラブとは、研究を進める一方、人間形成をも進める所ではなかろうか。それが可能であればこそ健全な活動が営まれるのであり、車の左右の車輪に大小はないのである。

◎望まれる一、二年の活躍

クラブ活動において理想的なのは全部員が協力する態度であるが、何分受験専門機関のような大手前では到底望めそうもない。そこで三年は大体においてクラブでは隠居的存在となり、全く活動にタッチしない。（但し、文化祭のみは例外）　すると望まれるのは一年二年の活躍だが、今度の学区制変更は、席次との生存競争をますます厳しくするであろう。そうなれば部活動は圧迫され許されなくなるかも知れない。わがクラブの現状を記すと、三年男二、女四、二年男六、女七、一年男五、女六である。この中で毎日動く者は、二年生全員と一年生五六人だけであり、来年が非常に心細い限りである。我々は現在の一年生の方の、それも機知に富んだ人の入部を歓迎する。有能な働き手となり来年を背負つて立つような・・・・・・

ある日　君は
雲の上で　寝ていた
俺が　大きな　声で呼ぶと
起き上つて　ニッコリ笑つて
手を振つた

ある日　君は
黄色の　泉で　泳いでいた
いつの間にか　俺も　泳いでいた
三人は　水の　かけ合いつこをして
遊んだ

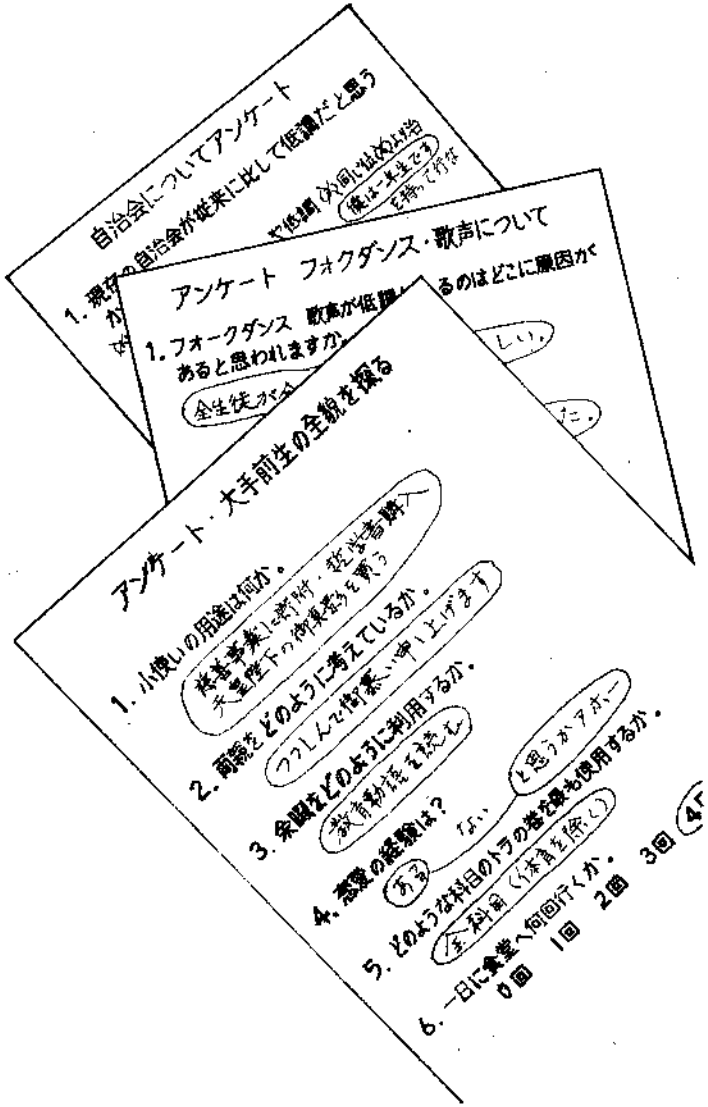
ある日　君は
ライオンの背に　乗つていた
俺が　こわくて　近寄れないのに
君は　平気な　顔で
ニコニコ　笑つていた

ある日　君は
白銀の　中を　素足で　かけてきた
まるで滑つて　来るようだ
君の　後には　細く長い
スロープが　出来た

ある日　君は
七色の　橋の上で　おどつていた
きれいな着物を着て
手には　二つの　扇を持つていた
俺に気づいて　ニッコリ笑つた
どこからか　琴の音が　聞かれた

三十七年十月

アンケートによる大手前



フォークダンス・歌声に「ついてのアンケート」

スピーカーから流れる軽快なリズムに合して輪をつくる若人の集り!!この、生徒間のつながりを深める？フォークダンスや歌声などについて生徒諸君の考え、希望などを拾いあげてみた。

① フォークダンスや歌声を行うについての意義はあるだろうか

(一) 意義がある　六十五%
(二) 意義がない　二十四%
(三) 無答　十一%

となつており、(一)の理由として、「親善を増す」というのが割に多く見られたが、その他として「なんとなく楽しい」「身心が健康になる」などがあつた。

結果から見ると(二)の意義なしの方は(一)の三分一程だ。(二)の理由として「参加者が一定しており、少数である」というのが多いようだ。これは(二)の方の意見を出された人も痛感することではないだろうか。

② 参加した事があるかどうか

(一) フォークダンスに
(イ) ある　七十九%
(ロ) ない　二十一%
(二) 歌声に
(イ) ある　六十一%
(ロ) ない　三十九%

フォークダンスの方は運動会などもあつて、歌声よりも参加した人が多いのはうなづけるが、それにしても歌声の方に割に多くの人が参加しているのには驚かされた。

参加しない理由としては、歌声の方に、「つまらない!!」というのがあつたが、「連絡などが不十分で、参加できない」「参加する機会、きつかけなどがつかめない」などという意見も見られ、これらP・Rによつて大いに盛んにできるのではないだろうか。

フォークダンスの参加しない理由として一番大きな問題点は「少人数で、特定の人達ばかりで、気がひける」というもので、やはりここでもちあがつてきた。

又全般的に見て、フォークダンスの方は倦怠期といつた感じがする。「だいたいにして週に一回」というのが多すぎる」という意見があつた。

③ **以上のは参加した経験だが　実際数はどうだろうか**

(一)フォークダンスに
(イ)多数回参加した　三十八%
(ロ)数回　六十二%

(二)歌声に
(イ)多数回　二十五%
(ロ)数回　七十五%

だから現に参加している人はごく少ないものである

フオークダンスはクラブ単位で

⑤ **そしてこれからの気持が　友達に誘われたり多勢の人が参加していたら　これらが**

(一)フォークダンスに
(イ)参加しよう　六十四%
(ロ)やめとこう　十九%

(二)歌声に
(イ)参加しより　五十九%
(ロ)やめとこう　二十一%

という意志を生じる。

故にこれらの点からも、もつと歌声やフォークダンスを盛んにすることができるのだが・・・・・

⑥さてこれらを行う場所だが…

フォークダンスでは、現在の場所の他に「コート、体育館で」というのがあつた。現在の場ではまわりが少し広すぎるのだろう。

歌声の方では「中庭が一番多かつたが、音響効果を考えると、どうも適当でないらしい。「金蘭会館で」というのがあつた。現在行つている講　堂なんかよりもずつと気がきいてるネ!!

以上かかげた点から、これからもつとこれらを盛んにするためには、おのずから結果がでてくるが、ここでひとつ一女性徒の切実なる（?）告白を…

「フォークダンスに参加しようとして行つて見ると、実際にやつている人は少しで、のこりの人は見ている。人にじつと見られていたのでは楽しめないような気がして入るのをやめてしまう。又まわりを見回すと、その辺には女子が多く、男子は、他の運動をしている女子どおし組んでは男子の間にまじつた女子がかわいそうである。

人数が多く、浄田1が踊りにくいのはクラス単位で積極的に参加し

大手前生の生活白書

大手前の生徒の日常生活のアンケートを取つてみましたところ、次のような回答が出ましたところ、次のような回答が出ましたので、それらを分析してみたいと思います。

時間はどう使われているか

一、起床時間は何時頃か

- ○六時以前　八
- ○六時～六時三十分　五
- ○六時三十分～七時　二十二
- ○七時～七時三十分　六十二
- ○七時三十分以後　三十九

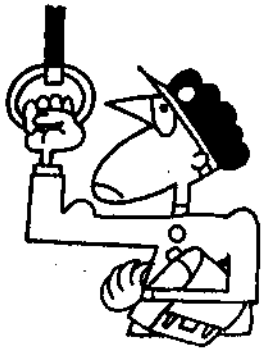
二、通学にはどれ位の時間が必要か

- ○十五分以内　十一
- ○十五分～三十分　四十八
- ○三十分～四十五分　四十六
- ○四十五分～六十分　十九
- ○六十分以上　十七

三、昼食時をどのように活用するか

- ○スポーツ　三十四
- ○読書　十二
- ○雑談　六十三

スポーツが少なく雑談が案外多いようですが、運動場が広いのですから、昼休みは屋外に出て、大いに運動をしてもらいたいと思います。



四、家庭での学習時間はどれ位いか

- ○二時間以内　二十二
- ○二～三時間　三十九
- ○三～四時間　四十九
- ○四時間以上　二十三

学習時間はだいたい予想通りの結果でした。

五、睡眠時間はどれ位か

- ○六時間以内　十
- ○六～七時間　四十二
- ○七～八時間　五十五
- ○八～九時間　十九
- ○九時間以上　十

睡眠時間が六時間以内という人がありますが、これもテレビの影響ですかな。

大きいスネをもつ！？

六、小使いは一ヶ月どのいか

- 五百円以内　八
- 五百円～千円　四十一
- 千円～千五百円　四十六
- 千五百円～二千円　十九
- 二千円以上　十八

小使といつても、純粋なものと、内容豊かなものとがありますので、その点は解りませんが、親のスネをかじつている連中にしては少し多いようです。

大手前生はかくなやむ

七、学校生活でどんな悩みを持つているか

- 成績のこと　六十六
- 自分の評判　九
- 交友関係　三十八
- 学校の施設が不十分　二十六
- その他　十五

「成績のこと」について悩んでいる人が大手前の名に恥じず多いのには敬服しました。しかし、「入試のこと」をつけ加えなかつたのを残念に思うと同時にお詫びいたします。

八、家庭生活ではどんな悩みをもつているか

- 両親との対立　十二
- 兄弟との対立　九
- その他　二十九
- 無答　一〇一

案外肉親との対立が少なく、無答（悩みはないと善意に解釈します）が大多数であつたことは、まことに喜ばしいことであります。それを裏返えせば、大手前生は従順であるとも、大学に入るまでは平和共存、いや肉親の方が後退ぎみともとれますがね。

九、先生に対して反抗的な態度をとることがあるか。

- ない　六十一
- ある　六十六

「ない」が女生徒で「ある」が男生徒とはかぎりませんよ。優等生諸君は「ある」と回答しなかつたでしようね。

十、身体的欠陥で悩んでいるか

- ない　四十六
- ●ある

- 背が低い　三十一
- 背が高すぎる　五
- ふとりすぎ　十三
- やせすぎ　十四
- 容貌が悪い　二十二
- 近視である　三十一
- 病気である　八

「容貌が悪い」と「近視である」は大手前生の宿命でありましよう。「背が低い」のは先生だけじゃなかつたんですね。

十一、人前で自分の意見を述べたりできるか

- 積極的にできる　二十八
- 進められたらできる　七十四
- 出来ない　二十五

「進められたらできる」という無責任な回答をしている人が多いのに驚かされる。人に進められても意見を述べられないのは、おしぐらいのものである。十七才にもなつて自分の意見を進んで述べることのできないような人は大いに反省してもらいたい。

我々はこう思う

十二、映画で一部禁じられているのがあるがどう思うか。

- 見せて批判力をつけさせるべきだ　六十五
- させるべきだ　六十九
- そんなのを作るのが悪い　二十九
- 禁止に賛成　二十二

それらの映画の是非を論ずるよりも、まず、なぜそのような映画が金になるのか、興言すれば、なぜ人々がそのような映画を好んで見るのかということを考えねばならないのではないだろうか。そして、高校生として言えることは、そのようなものを極力さけて、自分にけつべき感を養うことであると思うのだが。

十三、自分の生活態度をどう思うか。

- 積極的自己本位態度　二十五
- 消極的自己本位態度　五十三
- 道徳的理想主義態度　三十九

大手前生のよさは自分が悪い意味での個人主義者であることを認識していることである。

神もなければ仏もない

十四、どんな宗教を信仰しているか。

- 仏教　七
- 神道　六
- キリスト教　五
- 新興宗教　六
- その他　十六
- 無宗教　六十五

現代日本人がすべてそうであるように大手前生にも、宗教信仰者は極めて少ない。右記のような諸教派よりも、もつともつと、根強く、そして、その人の行動を左右する宗教があることを忘れてはならない。人々はそれを、カント派とかマルクス派とよんでいる。

十五、迷信をどう思うか。

- 信じる　十七
- ある程度信じる　四十六
- 信じない　七十二

「四当五落」これは迷信です。

十六、他人の不幸に出合つてどんな態度をとるか。

- 無関心　十八
- 同情する　九十二

○物質的援助をする　十三

「同情する」という回答が一番多かつた。大手前生のもつ「冷たさ」はここにあると思われる。「同情する」のは人間であるからです。しかし、人間であつても近代市民ではないのです。互にたすけ合うということをしてはじめて近代市民たる権利をも義務をも持つことができるのではないだろうか。「同情する」聞こえのいい言葉です。その言葉にだまされるのだ。

十七、友人を選ぶときの基準は、

○性格　九十三
○評判　十五
○成績　十六
○名益　二十六
○金銭　二十三

「性格」が圧倒的であつた。少なくとも学生の間だけはこうありたい

十八、将来、職業を選ぶとき何を基準にして考えますか。

○収入の多少　二十七
○その会社の将来性　二十四
○自分の好みが生かされるかどうか　四十七

十九、自分の性格をどう思うか。

○短気
○打算的
○虚栄心が強い
○自尊心が強い
○親切
○感情的

これだけのものをすべて備えていなければ大手前生とはいえません。

御意見拝聴

二十、政治・経済について自分の意見を持つているか。

○持つている　五十五
○あいまいである　六十
○持つていない　十七

自分の意見を持つていないからといつて、持とうと努力するのは馬鹿げている。それよりも、もつと新聞を読んだりして、比較的大手前生には無縁な、しかし必要である。政治経済に関心を持つことが大切である。意見を持つている人はもう一度認識しなおすべきである。

二十一、大手前生の制服、制帽について

○いいと思う　二十六
○普通　六十七
○よいとは思わない　四十八

別にいつたところで、どうというわけでもないが、日本だけですね。

全国画一の学生服があるのは、

二十二、大手前生は利己主義だと言われるがどう思うか。

○利己主義と思う　八十四
○思わない　四十三

人間だれしも利己主義なのであるが、それを認識しているところが、

かわいい。はないか。しかし、「思わない」と回答した人の中に案外利己主義だといわれている人が多いのではないだろうか。

二十三、現在の日本の国歌をどう思うか。

○今のままでよい　六十四
○変えた方がよい
・歌いにくい　二十七
・かたぐるしい　十六
・単調で親しみにくい　二十三

「国歌論」よりも「国家論」の方が先決だと思うんですが。

愛情か？食欲か？

二十四、恋愛の経験は

○ある　四十七
○ない　八十

カマトトが多いなあ、なんていつたらしかられるかもしれないが、経験者が案外少ない。しかし KON DON'T KNOW. は恋愛に含めるんですかと聞いた人がいる。

二十五、一日に何回食堂へ行くか。

○〇回　三十
○一回　三十
○二回　二十八
○三回　二十
○四回以上　十八

四回以上なんて、少し眉つばものである。まさか食堂へお茶を飲みに行くものでもあるまいし。

二十六、お弁当は何時限目に食べるか。

○三時限目以前　十七
○四時限目　十
○昼休み　五十一
○五時限目以後　二十一

次に、アンケートの質問の回答からひろつてみた文章を上げてみたいと思います。

○自分の不満をどういうことである程度満たすか。

■自分にぶちまける（はしを折る）
○アンケートにつまらぬ事を書いて不満をぶちまける。
○親友がないので自分の心の中に留めておく。
○ノートに書きつける事で解消。
○空をながめたり絵をかいたり文章を作つたりする。
○読書、音楽でまぎらしたり、そこから力を得たり自然をながめる。
○手紙にかく。
○両親をどう考えているか。
○何でも相談できて、満足している。
○子としての愛情をいだく。
○父親は素晴しい。母は楽天的すぎる。
○母ぐらい、いい人はないと思う。
○先生に対してどんな時反抗的な態度をとるか。
○自分のかつてな考えを押しつけ

ようとされる時。
○先生と言えないような態度言葉をされた時。
○物の一面しか見ていられない時。

自治会をさぐる

低迷の原因は……

現在の自治会が従来に比して低調だと思うか？という問に対して

(一)非常に低調　四十六％
(二)やや低調　三十％
(三)同じ位　十五％
(四)より活発である　四％
(五)無効　四％

これを見て判るように大手前生の半数近くが、現在の自治会を非常に低調だと思つている。

その原因はどこにあると思うか

(一)自治会役員の怠慢　三十五％
(二)生徒全体の無関心　三十四％
(三)一部の生徒　八％
(四)その他　八％
(五)無効　十五％

これで判るように自治会役員の怠慢と生徒全体の無関心とが圧到的に多い。

低調さがどういう所で現われたり、感じられたりしますか？という問に対して、答弁のまずさ、これは、役員の答弁のあいまいさを示すものであろう。議事進行がまずいという答も出ているがこれは答弁のまずさに関連するであろう。次に、フォークダンスや歌声の集りが悪い。自治会主催の事柄に関しての宣伝不足、自治会自体が、学校外の手先化しつつあるゆえに生徒の自治会という感じが薄れ生徒が本部に反感をいだいている、等の解答がなされている。議事進行や答弁のまずさは、本部役員の計画性がないという事に結びつきフォークダンスや歌声は本部役員が積極的態度に欠けているという事にほかならない。生徒が本部に反感をいだいているという事は、自治会役員と生徒との接触がないと言う事であろう。今後、自治会役員は積極性と計画性を念頭において、自治会活動を運営して行くべきであろう。一方生徒側も個人の自治会に対する認識を新たに反省すべきであろう。

以上

アンケート総数　三百枚
回答数　百四十六枚

関心の行方

あなたは自治会の活動にどの程度関心を持つているか。

(一)活動の全てに注視している。　三十四％
(二)自分に関係ある事だけ関心を持つている。　三十五％
(三)無関心　十五％

(四)無効　十六％

結果は右の通りである。自分に関係のある事だけに関心を持つている人が最も多数であることから、大手前生が利己主義であるというという一つの事実が推察される。これは大手前生の短所であり且つ長所でもあろう。活動の全てを注視している者も三四％を占めているという事は、自治会役員にとつても何をするにもはりあいがあり、今後の自治会役員の行動を期待できるであろう。

無関心という解答は、はなはだひどいと思う。無効の者に対しては語もない。多忙の中に生存しているのであろうかと、疑いたくなる。

委員会と一般の疎遠

自治会活動が会員と相互連絡を持つて行われていると思うか？

思うという者は九％、思わない者が八九％無効が二％である。全校生徒の九割近くが自治会活動が会員とよく相互連絡を持つていないと思つている。学校という一社会を構成する各個人がばらばらに行動して、なんらのまとまりもないような学校という名の一社会を作り上げないように自治会役員と生徒との関係をより密接にせねばならないであろう。

総会にもつと心を

生徒総会にはどの位出席するか

(一)いつも出る　七九％
(二)時々抜ける　八％
(三)時々出る　三％
(四)いつも抜ける　十％

この結果を見れば判るように、いつも出席する人が全体の四分の三以上を占めている。これは総会の定足数七五％を上まわるパーセンテージである。出席する人へ、何故出席するか？という質問に対し、義務だからという者が七三％を占めている。しかしこれだけでは、出席はしていても総会での態度がわからないので、この問題を一歩掘りさげてみると、関心を持つて聞いているという人が六二％、関係のない事をしている人が十五％、無効が二十三％という結果を得た。出席している人の過半数が関心を持つて聞いているがこれは全校生徒の割合から見れば半数にもたらず、結局は、議事に関心を持つて聞いている人は少ないわけである。時々抜ける。時々出る。いつも抜ける等を合わせると二一％になる。これらの人々への質問として、何故出席しないか？をたずねた所が無効が八五％という高率を示しました。このことより、大手前生の中にいかに無責任な生徒がいるかが明らかにわかる。このような状態では、同じ学校にいる人々に対して極端に冷淡で無関心であることは学校生活にうる

おいを失わせ、大手前生の校内生活を索漠とさせる。いい意味にせよ、悪い意味にせよ、大手前生には個人主義の空気が濃厚である。次になんとなくつまらないという答が十二%その他が二%、義務に反感を持つ、自治会がきらいだからが共に一%となつている。

総会での席はどの辺に坐りたいか？

(一)前の方　六一%
(二)中程　二一%
(三)後の方　九%
(四)無効　九%

生徒の半数以上が前の方の席を望んでいるのは、後の方では、意見がはつきり聞きとりにくいという理由からだろうと思う。

自治会構成の諸難点

現在の自治会制度自体に問題点があれば挙げて下さい。という問に対し代表会議とクラスの連絡が悪い。代表会議での議題は、前もつて各学級の学級代表に知らせておき、それを学級代表が各組で報告し、且つ組の意見を聞き入れ、それから後に代表会議を開くというふうにすれば生徒全体の意見も、代表会議に反映するこれも一つの方法であると思うが。会員の全員出席制これは、クラブ活動全面禁止にも関連してくる。

総会での議長と副会長とが同一人である事に対しても矛盾があると考えられているらしい。

独裁的な感じが相当強い

直接利害関係のある議題が少ないしたがつて全体的に関心の薄い傾向をとつている。

学校側にたよりすぎていて、自立性がない。

現在の自治会規約は、戦後の民主主義教育方針に基いているものでありこの当時は新教育方針の普及という意味で学校側の指導が多く規約に取り入れられているので、規約をある程度改正して、真の民主主義教育を受けるべきである。など種々の意見が問題として取り上げてあつた。

会長以下の書記と努力を望む

自治会活動を向上させることに関しての意見としては、

総会のある日はクラブを禁止する。

マイクの設備をよくしてほしい。

生徒の自治会、役員であつてほしい

真面目な思想が学校全体を取り巻くようにしなければ本質的な向上はありえない。

部長として、各組の副会長が多く出ているが、他からも有望と思われる者を選出すべきである。

自治会役員はもつと自信と啓蒙的精神をもつて自治会というものを生徒全体にP・Rすべきである。

二年生がもつと活ばつであるべきだ役員の人達が熱心にやつても、生徒が今ほど無関心であつては、空回り

人の自覚を呼び起こすことが先決問題である。

活動をもつと公表せよ。

数多くの意見が生徒自身によつて書かれた。

結局、大手前自治会には、自治会と一般生徒との間には溝があるということである。一年生も入学後、半年以上が過ぎ一応、落ちついて高校生活を楽しむ段階に入るが、一日も早く自治会に親しまねばならない。

生徒の間の問題を解決する自治会が校内に設けられ、認められているのはこの組織の活動を通じて、我々がしらずしらずのうちに、団体生活に必要な種々の訓練を受けるからである。このようなかくれた目的を持つ自治会を、我々の力で活発な自治会に作り上げなければならない。

詩集

THE WORLD

朝

哀怒喜楽

澄みきつた
朝もやの深い
雀二、三羽　さえずりあり
清々しい朝の空気を
コツコツ……
コツコツコツ……
出る人の顔も　清々し

雀

声はこと　姿はそこ
　逢つている所は　あそこ
毎朝毎朝
　同じ屋根の　同じかわらの
　　同じ位置
　楽しくさえずる
　雀二羽

天　顔を出す
ビル　顔　隠す
　人　顔　動かす
日の光　人　何を与え
　人　何を取る

孤独

雲一つなき
　澄んだ空を
　　ながめていたら
気が　意気が
　真蒼な　その中へ
　　白い翼を
　　つけて
飛んで行きそうに
　　なつた
夢中で腕をのばし
　　手を前に
　ずつと前に　伸ばし
　その翼を　もぎとつた。

文化祭ビジョン

文化祭の意義というようなむつかしいことは抜きにしても、やはり高校生が平素の文化活動の成果を発表する機会であるということを否定することは不可能である。またそれは文化祭当日の成績によつてのみ、成果の如何を云々する筋合のものでもない。平素の活動と、文化祭を開くための雑用に類した煩わしい準備、あるいは場合によつて起こり得る準備委員の意見の相違などの解決のための苦心等、関係者を悩ます数々の問題を処理して、開催までの運びをすることそれ自身にも充分立派な意義が認められるものである。元来やはり素人のやることであつて、展覧物にしても、演戯にしても、それ自身の価値は決して高いとは言えるはずがない。にもかかわらず文化祭の意義を認めればこそ、あちらでもこちらでも、殆んど例外なく開催されているのは前述のように、それを行うことによつて経験できる様々の事柄と取組んで、普通、教室内では得られぬような別の収穫を、全校生の協力によつて得ようと考えているからであろう。

このような観方をするならば、去る十一月十一日の文化祭が成功であつたとかなかつたとか言うべきものではないとも思われる。何事も経験であると見るなら、成功不成功など云々すべきではないようでもあるが、また一面大手前高校の文化祭はこうありたいという「ビジョン」――（一寸流行語になつている）――もあるべきであろう。

僕自身、本年はじめて本校文化祭にお目にかゝつたので、従来のものと比較することはできないことであるが実は従来何とはなしに、大手前についての「ビジョン」を持つて居たように思われるので、その立場からの印象はあげられると思う。

開催の運びに至るまでの種々の雑音は何処も同じと云うところで、特記の必要もない。展覧物は平素勉強に、逐われている人々としては、もちろん一夜漬けとか、借り物と言つたものが見られもしたが、素通りするのは惜しいようなものもあつて、あれを半日で片付けるのは何だか心残りせぬでもないような気もした。演戯物の方は第一部、第三部と二日がかりにするほど内容が充実していたとは思われない。むしろ一日にまとめた方が、すべての点で、すつきりとするのではないかと思つた。いわゆる出しものが余り多くはないが、それだけ精選されたことゝ考

文化祭

アレコレ

反省記

えてもよいのであろうか。出演者はそれぞれに熱心にやつていた。また大多数の生徒は舞台の気分と合致した態度を保持していたように見受けたが、これは文化祭が舞台上の出来不出来もさることながら全校行事としてはむしろ、受取り方の練習という点からも考えて、大切なことだと思う。そのなかで極めて少数の人が舞台とは全くちぐはぐな「ヤジ」を放つて、折角の雰囲気を壊してしまうのではないかと恐れたが、このことは同時に僕の「ビジョン」をも破りかけて、いささか残念な気持であつた。

国友　正

悔い多き文化祭

今度の文化祭は、日数を例年より半日増やしたという点では成功であつたが、その他の点では、残念ながら、不成功に終わつたと思われる点が多かつたようである。

先ず、せつかくの第一日目を、何故あんなに不調に終わらせたのか。それは我々の「前夜祭でなくて文化祭第1部である」というPRの不足、それに会員の認識不足と、そして出場者の練習不足との三拍子が揃つたためであろう。そして特に感じられるのが、あの時講堂にいた一部の者の行動である。彼等はプログラム第一番が終ると競つて場外へ出ていき残つたのは半数にも満たなかつ

た。これは、後から出場する者への侮辱であり、文化祭に対する考え方が誤つていると思われる。

第Ⅱ部は今度の文化祭の中で又、今までの文化祭の中で一番充実した展示であつたと思う。特に興味をひかれたのは地歴部の模型、理研部の実験等であつた。これらは作つてわずか二三時間で壊してしまうのは非常にもつたいないと思つた。

第Ⅲ部における観客の態度については、彼等の気持も解かるが、運営委員長が前もつて二度も注告しているのだから、もう少し高校生らしい態度をとるべきだつたろう。特に僕は警備係であつて、これらの者をとりしまつていたが、注意をうけるとペコペコあやまつていて、また少し経つと、すぐに騒ぎだす生徒が多かつたのは残念である。

総合して反省してみると、今年の文化祭は例年よりも良かつたとは決していえないと思う。特に第Ⅰ部の不調さは今後考えねばならない点を多分に残していると思われるし、第Ⅲ部における野次などは単にそのプログラムに対する野次だけではなく、簡単にかたづけられる問題ではないと思う。そして今後文化祭を行なわれる方は第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部を十分に使いこなせるプログラムを作つてせつかくの第Ⅰ部を無駄にしないよう願う。

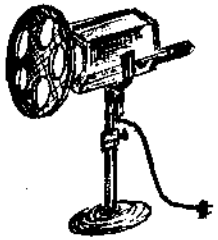
佐伯守康

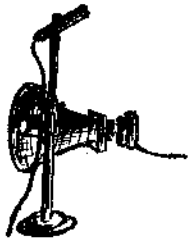
ライトの影に七時間

午後零時三十分きつかり、進行係の水島君から伝令が飛んだ。「開幕」だ。僕は一瞬緊張した。響きわたるベルの音、音もなくあがる幕、そして、期せずしてわき起こる拍手と、流れでるライトの光。かくして、昭和三十七年十一月十一日文化祭第三部舞台行事が開幕された。

おもえばこの二週間というもの、私たち、本部員や、文化祭運営委員たちは、毎日討議と居残りの明け暮れであつた。そして、第Ⅰ部の件、予算編成、プログラム編成がたてつづけにもめ、最後まで糸をひいたプログラムの表紙図案は本部員が考えるという笑えぬ幕切もあつた。こうして迎えた文化祭も、第Ⅰ部、第Ⅱ部ととどこうりなく進み、いよいよ最後を飾る第Ⅲ部舞台行事を開幕するに致つたのだつた。

文化祭中一番はなやかで、それでいて成功と失敗の別れ目となる第Ⅲ部にかけた運営委員の期待は大きかつた。しかし、ESS部の英語劇がはじまると、僕たち進行係と舞台管理が一番心配していたことが起つた。乱れ飛ぶヤジと怒





声。不規則に起る拍手と乱打。その騒然たる中に点滅する巡視班の懐中電燈。僕は一瞬顔から血の気がひいていくのを感じた。この事態をどうおさめるべきか、僕の頭はめまぐるしく回転した。ESS部からの「ヤジ停止」の放送の依頼。ナレーターからの訴え。会館道具係からの「やりなおし」の提案。しかし、僕は「舞台続行」を決意したいや、「舞台続行」を決意せざるを得なかつた。この時、「ヤジ停止」の放送をしたらどうであつたろう。又「やりなおし」をしたらどうであつたろう。かえつてヤジがひどくなり、かえつては舞台延長という事態をひきおこし、高額の会館使用超過料を課せられ大はばに予算を超過し、行事内容においても、経済上においてもさんたんたる結果を招ねいたにちがいない。

又、ダンスにおいては、ヤジがテープに変わり、舞台に飛び入るテープにひやひやさせられた。ダンサーにあたりはしないだろうか。足にひつかけてころびはしないだろうか。不幸なことには、この心配も的中し、テープが一人のダンサーの顔面にあたり　足にまとわりつくテープのためにおどりにも少々支障をきたしたようだつた。さすがに、一番最後の演劇部の劇のころには、ヤジも数すくなくなり、はじめて、文化祭らしいふんいきがもたらされたようであつた。

こうして、会長の「閉会宣言」をもつて、三十七年度文化祭が閉会された。

この間三時間半、午前九時からのリハーサルに立会つた僕にとつては、実に七時間舞台裏でたちつづけたことになる。しかし、七時間にわたる僕及び、ESS、音楽部、演劇部、進行係、巡視班の肉体的にも、精神的にも全力を使いはたしたこの結果が、成功であつたか。あるいは不成功であつたか。僕はうまい。

ただ、最後に一言いいたいのは、「もう少し、観客に良識があつてほしいことだ」　文化祭は、自治会だけが企画し、開催するのではありません。全校生徒のみなさんの協力と努力が文化祭という一つの形となつて表われるのです。当日いらつしやつた父兄の方、あるいは、他校の生徒の人たちは、この文化祭をどう考えたか。皆さんは考えてみましたか。現在の大手前の現状、すなわち、ガリ勉ばかりして、もつとも大切な人格の向上を考えていない人が数多くいるということを、もつとも適確にあらわした文化祭を自慢することができますか。各自の「無責任」がよりあつまつて、ヤジとなつて表われたものだと僕は解釈しています。

山本春樹

にくまれの記

初のコーラス大会が非常に成功して、いゝ気分になつている処え、文化祭について「スプリング」に何か書けということで、また渋い顔になりました。

コーラス大会はほんとに良かつたと思います。音痴の私が審査員のピンチヒッターに指名された時は、どうなることかと心配しました。他の審査員の方の正当な判定が狂つたりしてはと。それが大過なく、私の判定結果だつてさして他の方の相違がなかつたのですから、それだけでもいゝ気分なのに、〃赤とんぼ〃の大コーラスには全く感激しました。

学校行事にたゞの観客というかたちでなしに参加すると、その行事が終つても、余りいゝ気分になれないことが多いものです。つかれがのこることもあるでしようがかえりみて残念な点がいろいろあるからでしよう。今度のコーラス大会は後味がいゝという点だけでも、私にとつては有難い体験でした。

これまでにも、こんな体験はたゞ一度だけしかありませんでした。旧制高校の生徒だつた時のことです。記念祭のプログラムの一つに、巖本真理さんの演奏会を計画しました。全く素人であつたばかりでなく、終戦後間もない時のことですから、巖本さんの乗車券や、滞在中の主食を闇で手に入れることの方が、演奏会自体の準備より大変でした。とかくバタバタしているうちに当日が来たのですから、今思えば、随分と赤面させられるような手落ちがあつたのでしよう。が勿論そんな事に気付こうはずはありません。得意然として巖本さんを会場に案内して、驚きました。入口では入りきれない人々が幾重にもとりまいて、主催者の責任を追求中なので、とても演奏者自身にも入つてもらえない状態です。入場券の発行数が会場の収容人員に比べて多すぎたこともたしかですが、戦中戦後と久しく音楽から遠ざかつていた人々が、入場券の有無などおかまいなしに、どうせ高校生のやる演奏会だからと、整理のつかない状態で押入つたらしいのです。そうこうするうちに、一部の生徒が、役員と学校側の責任を追求すると、その場で臨時生徒大会を開きはじめました。巖本さんには一日控室に帰つてもらつて、話合をはじめました。当時、青年共産党同盟と民主学生同盟との二つの流れが学内にありまして、青共派の人々は、民同派が学校と妥協して記念祭を牛耳つていると非難してきていたのですが、それがどたんばで見苦しい形で出てきたわけです。

巖本さんに翌日あらためて、入場券をもつていて入場出来なかつた生徒だけに演奏してもらうことにして、やつとその場の混乱はおさまりました。ところが翌日が大変です。すつかり硬化してしまつた双方が、自己の主張の正しさを証明するんだと、人あつめをしなかつたばかりか、相互に妨害したため、会場に集つたのは当時者ばかり二十数人にすぎないのです。腹がたつやら、情ないやらで泣き出しそうになつている私に、「これ位の人数のときが親しみがもてていいんです」と巖本さんは少しもかまわずにはじめて下さいました。そればかりか、再三耳打ちしたのに、プログラムの三倍もの曲目をどんどんやつて下さるのです。係として嬉しかつたばかりでなく、たゞたゞ感激するばかりでした。先生が「得したね」と言われたときは、前々とはちがつた意味で泣き出しそうでした。前夜からいがめあつてきた苦々しい気分がお互の表情から消えて行くのをはつきりと見てとれた、ドゲインーの〃海〃は、今も忘れることが出来ません。

もう十五年も昔のことですから、いい面ばかりが思い出されるのかもしれませんが、この〃海〃とならんで、今度の〃赤とんぼ〃も、これから永く私のよい思い出となつてのこることでしよう。それにつけても、矢張り思わないわけにゆかないのが、文化祭の後味の悪さです。コーラス大会を立派に成功させた同じ人々が、どうして毎年後味の悪い文化祭しか出来ないのでしようか。毎年今年こそはと期待しながら、その期待のためかもしれませんが、年々悪化してゆくように思えます。たいていのことは一晩眠れば、ケロリと忘れてしまう方ですが、あの後味の悪さは格別です。時がたつにつれて、だんだん黒く澱んでゆきます。それは、考え込むと、しやにむに人を人間嫌いにひきずりこんで行く類のものです。やつと、忘れた頃には次の文化祭が近ずいているつてことを繰返しそうに思えます。音楽だけのもつ特殊な力が、当事者も参加者も一団にして〃海〃や〃赤とんぼの効果をうみ出すというのでしようか。とにかくこんなに言いたくないことを口にしなくてはいけないことは、お互に余りに知恵がなさすぎると思います。

平　正人

文化祭問題点

高校の文化祭なるものを、初めて体験し、それを顧みる時、反省すべき点が少なからずあつたと思う。まず文化祭準備期間中に於ては、下校時間が問題になるであろう。文化祭前日は九時まで残れたが、それまでの期間はどく早かつた。学校側から見れば、「教育上・道徳上・社会上遅くまで残る事はいけない」という事だろう。これは、「文化祭」というものを、ただ単なる学校行事の一部として行い、それ以上の何ものでもない、という考

えの上に立つているように感じる。「分化祭」が、文化系クラブにとつてイキガイであり、又大手前高校の平素の空気とは異なる、貴重な存在である。こういう考えに立つ時授業終了後、正味二時間たらずでは、意義あるものには出来ないだろう。それでは一学期から始めていれば良いではないか、ということになるが、そうゆかぬのが世の常である。「とにかくムチヤは言わない、半時間でもよい少しでも延してほしい」これが分別ある文化系クラブ住人達の切なる願いではなかろうか。

次に各クラブの展示時間の問題、これはぜひ改めてほしい。つまり、長くしてほしい。実に、短い、あつけない。文化系クラブに入つている人達は、完全に見切れない。前日汗水たらし、駈けめぐり、長時間の準備、疲れが出て居眠り、準備のために徹夜。——ああ——これの結晶がたつた半日で破れ、つぶれてペッシャンコ。実に、なげかわしい。「文化祭」を行うからには、その意義が果されなければならない。つまり形式的に流れてはいけない。半日たらずで各クラブの理解が出来るだろうか。この点で自治会は、もつと考えるべきだつたと思う。今一つ参考として、来年からは、各クラブ長又は、部員なりが見物人に付き添い、展示品の説明だけでなく各クラブの性格を述べてはどうだろうか。それから、少し気になつた事は、生徒が展示を見物後、ガラクタ市や、コームスに参加している人も多数あつたが、何もすることがなくて、ボンヤリとしている人達もかなりあつたように思う。ここでこの人達に於いて、「文化祭気分」が消えかかつては意味がなくなる。早く見終つてしまう、これはおもしろい所は長時間観覧するが、ジックリ落ち着いて考える所は早く通り過ぎる。つまり展示物の外面的なものだけを味わうという見方からくるのであろうが、これでは満足出来る状態ではない。それではどうすればよいかということになると、それは、展示物の真の意義というものに見物人をひき入れる。その出発点まで各展示物作成者が案内すべきであつた。「文化祭第一部」これは何か無意味なように感じられた。文化系クラブ員は明日の準備で忙しかつただろうし、帰宅するものもたくさんいて、「文化祭」に参加するものが少なかつたのではなかろうか。この問題と先の問題をも関係して、「文化祭二日説」を唱える。正味二日間である。一日目は展示会、二日目は舞台行事これが理想とするところである。まる一日の展示という事は、前問題点解決の手段ともなるであろう。

国民会館に於ける舞台行事。ここでは、当然やじとテープが問題となるだろう。テープを投げる事はやめるべきだと思う。舞台でやつている人は、テープを投げられて、うれしいという気持よりも、邪摩でシャクにさわるのではなかろうか。テープを投げる事が、この場合、真の意味からはずれ、ひやかしの多分に含まれている状態にある。それ故投げるべきではない。テープを投げる事自体は悪い。しかし、投げた人を先生方がすぐにしかる。これは考えるべきだと思う。少なからず生徒達は、文化祭気分にひたり、楽しく見物しているその時に、先生が生徒を叱かつた。この感じからして今までの気分が半減するのではなかろうか。やじを飛ばす事、これには、多くの問題があるようだ。「やじ」この語からは、二つの意味が現われる。一つは、この語本来の意味であるところのひやかす。言葉で防害する、という意味からくるものである。他の一つは、知的ユーモアにあふれる語である。第一の意味のやじ。これはやめるべきであろう。見物人はともかくも、舞台上の人にとつてはとてつもなくいやであるにちがいないからである。第二の意味のやじ（ここでもしやじという言葉全体からくる下品な感じでやじを嫌うなお、やじをユーモアと改名しておこう）つまりユーモアは、ある程度大事にしなければいけないのではなかろうか。見物人達は劇と並行して、このユーモアを期待しているのである。

高校に入り、中学時代にはなかつたユーモアを聞いて、高校生らしさ、楽しさを感じた。高校時代の楽しい思い出として残るものの一つは、ユーモアであろう。ユーモアを聞くことにより、「文化祭」の一意義であるし楽しむが満足出来るなら、ユーモアを発することを認めるべきである。

ここで文化祭に対する感想を終るが、文化祭全体としては、何か形式的にはしりすぎ、何でもよい、済ませば良い、という感じを受けた。この事をどう取るべきか考えてほしいものだ。来年は、「文化祭」の意義、気分、準備を十分検討のうえ立派なものにしてほしい。

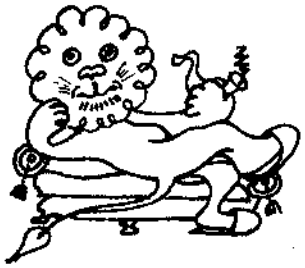
地歴部

アンケートから見た文化祭

第十五回文化祭がいろいろの問題を残しながらも一応幕を閉じた数日後、文化祭反省のアンケートを行いましたので、それを通じて見た今回の文化祭反省記をここに揚げて、今後の文化祭の参考とすると共に、私達全員がこの様な学校行事に対する態度について考え直してみたいと思います。（なお実施回収したアンケート数は次の通りです。各学年二クラス、回収一年六六枚、二年四六枚、三年四六枚、計一五八枚）

今回は二日間の文化祭を三部に分け、第一部は前夜祭的なものとして本校講堂において舞台行事等、第二部は一般参加をも含めた各文化祭クラブの平常活動の成果とPRを兼ねた展示会、第三部は午後から国民会館に於て父兄と共に舞台行事を観賞、というものであつた。そこで第一に生徒の参加率を調べてみると「全部参加した」というのが最も多く六十％近くを占め、次いで「Ⅱ・Ⅲ部参加」というのが二六％を示している他は三％前後で「全く不参加」というのは全学年を通じてわずか二枚であつた。これから考えられることは第一部の必要性に対する疑問である。二、三部はその日が一日文化祭のための休日であり、朝の集会で出欠をとることもわかつていたからであろうかほとんどの人が参加しているのに対し、一部はかなりその割合が減つている。これは一つは二、三年生の間には従来の前夜祭的気分がこびりついていて有志の自由参加なんだからという考えが頭にあるためであろうし、もう一つは、翌日の展示及び舞台行事の準備練習にたずさわつている人達の不参加によるものであろう。特に後者は一部の行事に参加したくても出来ないから、将来一部を全員参加制にするにしても問題となるであろう。これは後の「前夜祭について」の項でも「第一部として全員参加にする方がよい」という意見が一二％程度しかなかつたのと関連して今後の重要な課題である。

次に「今年の文化祭は楽しかつたか」という問に対して「楽しかつた」と答えたのが七十％、「つまらない」が三四％、残りは「まあまあだ」という答えで、これを学年別にみると二、三年では「去年の方がよかつた」というの六十％以上もありまた一年生も「案外つまらなかつた」というのが四十％近くもある。この結果からも分る様に今回は決して皆の楽しめる有意義な文化祭とはいえない様だ。その原因は、生徒全員の間に、文化祭的な雰囲気の盛り上がりが少なかつたこと、劇などの催しの種類が少なかつたこと、クラブの準備練習不足、等が挙



げられるだろう。次に展示について見ると「よくなかつた」という意見は少ないけれど、一般に準備不足で低調な様で特に良かつたクラブとしては地歴部が挙げられる位なもので、これが全体で三四票得ているのに対しESS（十一票）以下理研、映研、美術とふるわない。また実質二時間余りしかない展示時間の短かさにも問題があるのではないか。一年間の下積みな成果がほんの短い間しか観客の目に触れず、それに展示クラブ員はほとんど他のクラブの展示を見て回るひまさえないのが実状だ。一方国民会館における舞台行事を見てみると展示とは逆に「よくなかつた」というのが三三％「良かつた」というのが十一％という割合。

文化祭行事の頂点でありフィナーレを飾るべき舞台行事のあり方がもつと考えられるべきだろう。毎年のごとく劇の会話が聞えにくいのに加えて、今回は第一部に力を入れすぎて主体たる第三部がいかにもあつけなさすぎたように思う。あれなら第一部の必要は全く認められないばかりかかえつて第一部のために文化祭的盛り上りが損なわれたといえよう。また舞台行事ではヤジとテープの問題が印象に強いがそれは別の文に詳しく述べられると思うのでここではアンケートの結果、ヤジもテープも、舞台の進行を妨げない程度のものならいいということだけを記しておこう。

最後に今後の文化祭に対する希望としてアンケートの中から拾い集めてみよう。やつたら良いと思う催しの中では「中庭における食品売店」というのが最も多く他に「スポーツ用具の貸出」「剣舞」「野外美術展」「手芸品展示」「一般参加の枠を広げること」など。その他の一般的感想にはこれまでにも述べた様に「前夜祭の問題」「展示時間と展示クラブ員の展示見学の問題」「舞台劇のマイクの使い方の問題」などに関する意見が非常に多かつた。また「何よりも二年生が中心となつて文化祭気分を盛り立てていかなければならない」と三年生からの意見。

展示場の前に積んだ椅子がじやまだ」など、一年生の声。

「準備期間中の居残りをもつと遅くまでさせよ」という二年生の希望もありました。「編集委員」

文化祭に期待したい事

今年の文化祭は「ヤジ・テープ」に関する問題を除けば全く平穏無事に予定通り終り、なる程一見すれば成果が上がつた様に見える。しかしあの両日に私達は果たして会員相互の親睦を深めることが出来ただろうか。いやそこまで言はなくとも、生徒の手になつた文化祭だと肌で感じた人は一体何人いるだろうか。生徒の大部分は「文化祭とは何と私達と縁遠いものであるよ」と感じたのではなかろうか。それなら一体どうしてそう感じたのか。その原因の一ッは、準備委員が会員への文化祭積極参加を充分に働きかけなかつたこと。又一ッは、準備委員の不足したが為に教師が文化祭準備の中心となつて働かねばならなくなり、実質上生徒自身の手による運営がなされなかつたこと等に依る。勿論、文化祭がその性質上（自治会の三大行事の一ッであると共に学校の重要な行事）自由奔放なる要素と共に規律正しい要素をも必ず持つに至るのは当然ではあるが、生徒に「文化祭は私達と縁遠い存在」と感じさせる程、学校側が準備、運営面にタッチし、又、「ヤジ・テープ」を取り締つたということは、そうさせた原因が私達生徒自身にあつたにしても（事実そうであつたのだが）長年つちかわれてきた本校の生徒の自治にとつて絶対に歓迎されざることである。ことは言を待たない。私達三年には来年の文化祭について述べる資格はないかもしれないが、次の気持ちだけはくんでもらいたい。文化祭には生徒の全てが参加する様になることを望みます。それが文化祭の最大の意義であるし、そうすることが又、あなた方の義務なのです。

三好健前

雲

山村暮鳥

丘の上で
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

無題

今度の文化祭は、今年こそ落着いて見ようと思つて迎えた高校時代最後の文化祭でしたが、〝第1部のあり方〟〝舞台行事観覧者の態度〟〝先生方の御指導〟等の点でまだ私達が考えてみなければならない問題を残しているように思います。特に私達三年生の間では、観覧者の態度と、それに対する先生方の御指導の方法に、さまざまな意見が聞かれたので、私もこの点について、ふり返り考えてみようと思います。今年は国民会館に於けるやじやテープに、例になく、先生方から厳しい取締りをされたように見えました。先生方にとつては、統制力のない執行部と、あまりの騒がしさに仕方なくとられた処置だつたのだろうと思います。しかし、その効果はどうだつたでしょう。より一層の殺伐とした空気を感じたのは私だけだつたでしょうか。確かに、私達観覧する者自身、〝自分達の文化祭である〟という認識に欠けていたことを深く反省しなければならないと思います。去年は出演する側に立つて、今年は鑑賞する側に立つて、文化祭の主催者が学校であれ、自治会であれ、私達が作り、私達が盛りとげていかねばならない事を痛感しています。だがこの反面、毎日を勉強に追われ、大学に振回されている私達には、たまにやつてくる文化祭や運動会や自治会祭の時だけでも、はめをはずして騒ぎたい気がすることは、見逃すことはできません。解放感と、日頃からうつ積しているもやもやとした気持が、あの時の、テープとなり、みかんとなり、やじとなつたのではないかと、私は考えています。また、やじの騒がしさをいやだと思いながらも、私達が先生方の御行為を卒直な気持で受入れられなかつたのも、ここにあると思います。もちろん、こんなうつ憤晴らしは、よくありません。しかし、こんな、テープやみかんやつまらないやじで、うつ憤を晴らさねばならないというのは、何かが誤つていると思うのです。社会の責任だとも、教育制度がゆがんでいるんだともいえましょう。だがこれは今の私達にはどうもならないことです。今の私達にできるのは、せめて大手前の中で解決できることに努力してみることです。入試勉強という弊害はとり除けないとしても、うつ憤を一時にはきだしたりする必要はなくなると思います。自治会は決してフォークダンスや、歌声の指導をする機関ではないのです。また卒業を目前に控えて、今はただ後輩の方々の御努力を頼むしかできませんが、この機会に、少しでも学校というものについて考えていただけるなら幸いに思います。

打越裕子

先輩を訪ねて

理論物理を一すじに

初冬のある土曜日の午後、私達は京都大学大学院理論物理学科にて御研究中の先輩、昭和三十一年卒第八回生板東夫妻を尋ねた。貫録十分の堂々とした理学部の門をくぐり、いちょう並木を通つて目ざす研究室へ着くと板東夫人が私達を暖かくむかえて下さつた。以下は見るからに誠実で研究に生きる御主人板東弘治さんとそして又若く美しく才気あふれる明るい板東昌子さんと私達の一問一答である。（夫人をW、御主人をMとする。）

I「まず最初に京大に入られた動機といつたものは何ですか」

W「そうやね。その頃で入る学校というと京大か阪大でしょう。阪大はあつちこつちに分れているが京大はまとまつている。そんなものかしら。」

I「専攻科目は何ですか。又どういう御研究をしておられるのですか。」

W「理論物理です。素粒子の研究をしています。」

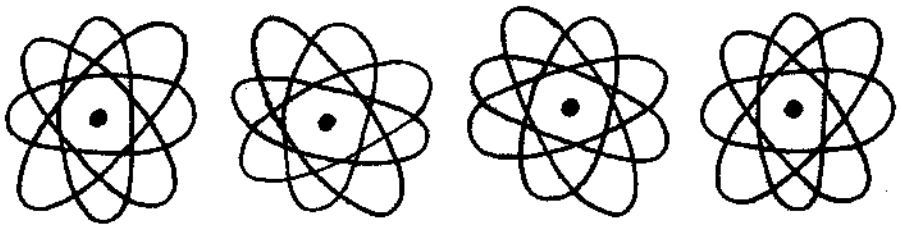
M「僕もそうですが、原子核の方を研究しています。」

I「当時の大手前気風はどんなものでしたか。」

W「大手前気風つて今でもあんまりかわつていないのとちがうかしら。皆よく勉強したはつたね。選挙も信任投票だつたし総会でも皆勉強ばかりしていたし。」

I「高校時代の思い出は…」

W「三年生の時受験勉強に対して反感を持つていたの



で今は大学に入られる永田先生に長い長い手紙をかいたら先生が又長い長いお話をして下さつた事が印象に残つています。」

M「ぼーつとしていたので……」

I「クラブは何に入つておられたのですか。」

M「何も入つていませんでした。」

W「理研と弁論です。」

I「当時の自治会の文化的活動としてフォークダンス等はどんなでしたか。」

W「フォークダンスは丁度、やつてよい、悪い、といつてもめている時でした。家庭科の先生は絶対反対されてね。」

I「御趣味は」

W「音楽、特に歌をうたうのが好きです」

M「別にありません」

I「休日をどの様にしあすごしておられますか」

M「計画では一ヶ月に一度ぐらいは山を歩こうつて決めたのだけれど実際にはやつてしまわなければならない勉強等があつてね。……」

I「テレビは見られますか」

M「テレビは見ません。この辺ではテレビのない家が多ですよ」

I「失礼ですが御収入は」

M「奨学資金が一人一万五千円だから二人で三万円。それにアルバイトとして家庭教師や論文の訂正をやつたりしますからまあまあやつて行けます」

I「女の人は結婚したら色々と障害ができて研究が困難になると言われていますがその点はいかがでしようか」

W「私達はまだ新しいから用事といつては掃除、せんだくに食事の用意だけなのでそんなに手間がかからないけれど育児の場合には困ると思うので託児所の問題等を考えています。時代によつて育児法もかわつているからその時代にあつた育児法をすればよいと思つています。買物もかいだめのできるものはかつておいて早く帰つた日は手のかかるものを作り遅くなつた日はインスタント食品などを利用して合理的にやれば別に困りません」

M「理解のあるだんな様だからね…（笑）家の仕事は女の人がするものとは決まつていないから僕も手伝つています」

W「時々お茶わん洗つてくれるね」

I「研究をしておられての苦心談をおきかせ下さい」

M「研究といつてもそんなに大それたものではないので本当の研究についての苦労などはありません」

W「今研究している理論から次の理論に移る時どういう

方向に行くか見つけなければならないのがつらいね」

I「まさに現代版のキューリ夫妻ですね」

M「そんなにえらくないよ（笑）」

E「当事者として同じ研究をしておられますがその点での特質はどういうことですか」

W「一度協同研究をしてみようと言つているのだがいつできることか……」

I「日常生活についてですがまず起床時間は」

W「九時頃です」

I「帰宅は、いつしよに帰えられますか」

W「五時か六時頃です。朝は自転車の後に乗せてもらつてくるので大ていいつしよですが帰える時はいつしよに帰える時とかえらない時があります」

I「家は遠いのですか」

M「自転車で十分の所にあります」

I「就寝時間は」

M「一時か二時頃です。十二時以前に寝るのはめつたにないね」

I「最後に後輩に望むことは」

M「悪い意味での利己主義にならないで、又自治会の事についてももつと連帯感をもつて自分達の手で盛り上げていこうという気持がほしいですね。又金の事について真剣に考えていくという態度を自分自身でやしなつてほしい」

ヨーロッパ旅行

諸君は、二学期の始業式の時に校長先生が「本校卒業生である中南幸子さんと竹村三枝子さんが欧州旅行をされて帰つてこられた。」と話されたのを覚えておられるだろうか。我々はその中の一人、中南さんにその時のお話しをうかがつた。竹村さんは現在東京にお住いだとかで残念ながらお話をうかがうことはできなかつた。中南さんは一九五七年に本校を卒業され、一年間大阪商等貿易講習所というところで英語を勉強されてそのあと一年間家庭におられ、それからアメリカのサンフランシスコ郊外にある州立サンマテオカレッジへ留学された。そして今年の一月にそこを卒業された後、五ヶ月間働いて金をため、それから三ヵ月かかつて欧州各国を回つて帰国されたのである。それではそのお話のあらましを掲げてみよう。

— 動機はどういうことなんですか。

○いつも聞かれるけれど、日本へそのまま帰るのはつまらないと思つたことと、各国の生活事情などを直接自分の目で見たかつたことです。

— 一緒に行くのに竹村さんを選ばれた理由は。

○彼女は私がアメリカにいる時にはまだ東京にいたんですが、私が卒業する少し前に手紙を書いてこういう計画があるが一緒に行かないかとたずねたわけです。それで彼女は一応留学生ということで渡米し、向こうで三ヵ月間私と一緒に働いてお金をためたんです。

— どんなことをしてお金をためられたんですか。

○子守り、留守番、日本語新聞の原稿校正などをいりました。

— オーロッパ一周一日二ドル

旅行に要した費用はどれくらいになりますか。

○一人で八四〇ドルくらいになります。

— アルバイト的な仕事でよくそれだけの短時間に八四〇ドルもたまりましたね。

○アメリカは非常にくらしやすい国です。支出も多いかわりに収入も多い。支出をちよつと切りつめるとお金くらいすぐにたまりますよ。日本でアルバイトしてそれだけのお金をためようとすると十年くらいかかるかもしれませんね。

— 旅行中、宿なんかはどうされましたか。

○アメリカではだいたい知人や、知人のまた知人に手紙でお願いして泊めてもらいました。それからヨーロッパでは知人宅やユースホテルなどを利用しました。

— お金はどのように使われましたか。

○アメリカでは一ドルで大体日本の百円ぐらいの気持で使つてます。またそれくらいしか値打がないのですよ。私達の費用はアメリカで全部銀行預金にして旅行中は小切手を書き、各国の銀行でキャッシュにかえてもらいました。

— チップなんかは。

○少々とまどいましたね。大体買つたものの一割五分くらい払うんですが、その計算がややこしくて……

— 言葉で困まるようなことはありませんでしたか。通じるのは英語だけなんですか。

○フランス語を片言程度覚えました。大体どの国でも身振り手振りで通じましたよ。

— 各国の風俗、生活、習慣などについてお話し願います。生活水準の高いのはやはりアメリカですか。

○そうです。さきほども言いましたように支出は多いけれど反面収入も又多いから生活はしやすいです。

— 日本の生活水準は。

○東南アジアでは一番上、ヨーロッパに比べると最低だと思います。

―生活様式について。

○アメリカではどんな服装をしていても全く気がねなしです。イギリスはやはり格式ばつたところがあつて、伝統を重んじます。フランスは日本人が想像するような派手なところは少しもありません。商店なんかもみんな地味で、流行の先端をいくような服はあまり売つていないし、あるところでもショーウインドウのすみに小さくたつています。ドイツは実質主義でなんでも長年の使用に耐えるような丈夫なものを使用しているようで、それがそれぞれその国民性がよく表われているようです。

―日本製のカメラやラジオなどは海外での評判はよいと言われていますが……

○実際その通りだと思います。アメリカの人などは半数近く日本製のカメラを使用しているように思われました。

―レディファーストについて。

○単なる習慣で、特に女性を尊重しているのではないんです。無視すると「あの人は礼儀知らずだ」などと言われるのでしょう。

―人種問題について。

○アメリカでは北部でも態度はていねいだけれど、東洋人などは一段下に見ているようね。イギリス人は一般に外国人には親しさを表わしません。フランスは又本当に自由の国で、白人、黒人の別なく皆仲良くやつています。パリには黒人はとても多いのですよ。それから人種問題にはあまり関係ありませんけれど、ドイツ人は日本人と同じで外国人というと皆がじろじろ見ます。

―各国の食事や、水について

○みんなあまりおいしいとは思いませんでした。私はコカコーラが好きなんですが、ドイツやフランスでは水が悪く、そのためにコーラもおいしくありませんでした。スイスの水はよかつたけれど……

―テレビ、ラジオなどの普及程度は

○テレビのよく発達しているのは日本とアメリカで、次がスイスですね。ドイツなどはチャンネルが二つしかありません。ラジオはどの国でも同じですがね。

―帰路はマルセーユから神戸までの間、どこかへ寄られましたか。

○イントのボンベイに寄港しました。

―コレラ騒ぎは。

○船の中で知りました。香港へ入る前に予防注射をされました。香港ではこわごわ中国料理を食べましたが、おいしかつたです。それから、神戸では一日とめられました。

―話しが前後しますが……アメリカでのお話しを聞かせて下さい。学歴は就職に大きく影響しますか。

○あまり影響しません。が、学歴ということよりその人の能力を重要視するんじゃないかしら。

―勉強の方は。

○中国人は熱心に勉強しますね。

―最後になりましたが、大手前時代のお話しを。

○自治会活動にはあまり興味を持つてなかつたの。

―クラブは。

○写真部でした。竹村さんもそうだつたのよ。

英語はきらいだつたが…

―英語はどうでしたか。

○正直言つてきらいでしたけれど……海外へ行きたいというあこがれは持つていました。

―旅行のことで何か役立つたことは。

○各国を実際に見て、その国の特殊な事情や人間などの性格をある程度つかめたことと、それが現在の職業に役立つていることです。

―現在どんなお仕事をされておられますか。

○外人観光の案内、つまり申込みに応じてスケジュールを組んだりすること、とガイドです。

―どうも今日はわざわざありがとうございました。

東住吉高校へ倉西先生を訪ねて

バス道路からどろんこ道（ひどいぬかるみで、筆者は靴を泥んこにした。）を入つた所に広大な敷地（三万平方メートル程あるそうだ。）の立派な学校がそびえていた。大手前をロンドンにたとえるならここはブラジリアの感がある。シンプルな正門を入るとすぐ右側に事務室があり、用件を告げると、「靴をぬいで、スリッパに替えて下さい。」と、いわれた。廊下はちり一つない。

入つていくと倉西先生がでてこられる所だつた。第一印象はまずまず話しやすそうだつた。

倉西博之先生は二十七年三月にわが大手前を卒業し、東大へ入学されたが、二十五年後期の生徒会長に選ばれるなど、非常に活躍しておられた。又先生は最後の旧制高校を経ておられる。

以下は先輩のお話をまとめたものである。

―高校の教師になられた動機は？…

○大学はでたけれど……つてやつでね！。いつのまにかなつて、三十二年にこの学校へ来たんだね。

―専攻科目は何？。

○国文、高校時代から文科系へ進むことは決めていたけれど、美学（曰く「哲学の一分野」）か国文にしようか迷つた。結局国文になつた。

―先生のいらした当時の大手前気質について ―

○一口に言つて自治会活動には無関心だつたね。生徒総会のときはすごいヤジで困つたよ。

（記者曰く「昔も今も変んねえなあー。」）

―会長になられた時の事を ―

―選挙は信任投票でしたか？。

○役員選挙のときは対立候補が立つたよ、それから次期の選挙のときに、選挙監理委員がミスをやつてね教室が投票場になつていたが、黒板に書いた名前の書記と会計が入れ替つていたんだ。その後の生徒総会で「これは会長の絶対責任、選挙は無効だ。」とつつこまれたが結局強引に押し切つてしまつたよ。

―今でも大手前の前を通つたりなさることがありますか？

○うん、よく通るよ、府庁へいくときにね。

―昔の大手前と今のそれを比較して ―

●そうだなあ、（言葉をにごして）今の方が紳士的なんじゃないかな。（うまくにげられた。）

―高校時代の思いでについて

●今のところつつこんだ事は言えないことが多いけれど（しばらく考えて）二年か三年の時、弁論大会でね、その時の弁論部の顧問が原稿の審査をやるといいだしたんだ、ところがそれが生徒の間で言論統制だと問題になつて、片や、生徒総会、片や職員会議でおもしろかつたが、今から思うと、その先生の狙いというと、ある生徒の思想を懸念してそんなことをしたんだろうが、とにかくその頃はみんな分別もないし……結局職員側が折れ原稿審査の代わりに議題の事前通告をしてくれということになつた。

ところが、その問題の生徒が先生に、何かを言われたとかで、演説はせずに、彼の持ち時間だけ壇上につつ立つていたんだ。みんながさわぎだして、とうとうその人が退場するという騒ぎになつたんだ。その後は竜頭蛇尾で、うやむやのうちに終つてしまつたね。

―それでは先生御自身のことについて、奥さんも、大手前卒業生だそうですが？

○うん、一つ年下でね。どうして知つたの？……

―恋愛ですか？……

○まあ、そんなところかな……

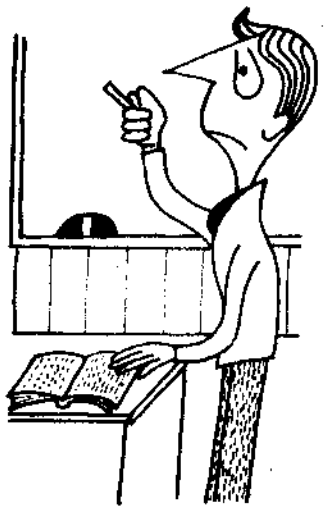
（夫人喜美子さんとの間に、すでに二児いらつしやるそうです。）

―お酒の方は？……

○相当いける方だよ。

―スポーツは？……

○あまりやらない、ただ大学時代ボートとスキーを一年ばかり……（カメラマン曰く「いいですね」）



―高校時代は、どんなクラブにおられましたか？

○文芸と演劇にいた。演劇には、「お前にいい役があるから。」つていわれてね。

―小松素彦先生はこの間までこの学校におられたそうですが、一口にいつてどんな感じでしたか。

○（間）新しいことに対する意欲の旺盛な人間と云えるだろうね。たとえば、環状線が開通した時に、自宅から（大宮町）わざわざ西九条を回つて学校（東住吉）へ来て、「一番電車に乗れんで残念やつたと残念がつていた事がある。

（先生、時計をちらつと見はつたから）

―さてそれではそろそろおいとまします 最後に、学校の中を見せていただきたいと思いますが ―

このあと学校の中を少し歩き回つた。まずろう下から校庭へ出る。非常に広い、右へいくと鉄筋コンクリートで増築中の校舎がある。正面の運動場の片隅には、運動系のクラブ長屋があつた。女子の体操クラブの人が残つていた。倉光先生について聞いてみると、「なじみやすい。」「話しやすい。」そうだ。

独唱

山村暮鳥

かたはれの
そらの眺望の
わがこしかたの
さみしさよ。

そのそらの
わたり鳥
世をひろびろと
いづこともなし。

ルゲンワの旅

村上輝康

プロローグ

千九百六十二年、八月十二日、午前二時五十分。高松の灯が澄んだ瀬戸内海の空気を通して見えてきた。昨日二十時五十五分に大阪をたつて以来ドエライ混雑の中を過ごして来てほとんど一睡もしていない私達ワンダーフォーゲル同好の面々は、高松から今治までの五時間のうちに今までの疲労をいやしておく必要があつた。だからその起点となる高松の港は、何か期待をしていいような気持を私達に持たせながら近づいてくる。

皆ちりぢりになつて桟橋におりたつた。先発に土讃線の列車があつたので比較的のんびりした気持になつて、国鉄高松駅の方へ歩く。

故郷を通りこして

先発が出てしまうとその後へ私達の乗る松山行が入つて来た。ガラガラの前の方の席に座つて一行は弁当を求めはじめた。私は河田君と一本のサイダーを飲み合つて早速新聞紙や、先輩差入れの週刊誌をひいて座席の上、ではなくて下へ寝床を作つた。四十五分してやつと汽車は出発。私は堅い寝床にもぐりこんで、睡眠を確保するために、せいいつぱいの努力をする。この努力にむくいず、私は二時間半程とれただけであつた。しかし、座席の下のベッドは上でよりも落着いて寝られることを身をもつて体験できたのは大いに有益であつたと思う。ようやく白みかけて来た空にのこのこおき出してあたりを見まわすと、もうほとんどが起きてしまつている。

空気はすみきつていて、むこうの窓には四国山脈が、朝霧の中に、ぼやつと浮んで見える。一行はやつと落ち着いてきて、私達がワンデルンに来ているのだと認識しはじめた。網棚の上のリュックに青色の三角旗が見だつ。

七時過ぎ、私の故郷の駅を通り過ぎる。私の空想していたよりずつとこじんまりしていて、より鋭い。私は、昔そこで遊んだことを覚えている川の上を通つた時、窓から体をのり出していつもここで鳴つた汽笛が河原の空気をふるわせるのを聞くともう何ともいえない感傷的な気持になつた。窓から体を入れた時は、えもいわれぬ虚脱とともにこれからの旅行に対する大きな希望が胸に生じてきた。そのうちに今治に着く。

青い空・白い空

今治の町は朝早いせいか舗装された道路にはほとんど車が走つていない。今治で買物をしようとしたが店が開いていないので瀬戸田に全ての望みをかける事にした。桟橋付近の公園で食堂の朝食をとり、ピカピカの、モダーンな、きれいな、新しい船に乗つた。

船が来島海峡を渡りはじめると四国の本土には高縄半島の山々が緑色をうねらせながら走り遠く四国山脈が見える。海上には芸予諸島の南部の一連の島々が美しい影を海に写して浮んでいる。緑色はまだ明るい。その緑と、海のすき通つた青さの間にあつて、あらわに現れた土の色が印象的だ。空には厚ぼつたい純白の雲が青さから飛び出した様に流れている。私の心の中の緑と青に対する枯渇はもうこれだけの景色を見てほとんどついやされた様だつた。いろいろあつた島々の中で特に私の心の中にこんがりと焼付いた島が一つあつた。それは本当にそのまま頑縁にかけられるような美しい調和を島の形と松の木の枝ぶりの中に持つていた。そして海にはクラゲが見える。

ねぐらとえさを探る

島の間をぬうように進んで瀬戸田に着く。思つたよりずつと静かな町だ。そこで一行を三組に分け買物と斥候に当てた。私は一人、船の上から目をつけていた場所に向つて歩るき出した。少し歩くともうみやげ物店はなくなつておだやかな景色となつた。せみの声がものうな太陽の光の下、段々畑の向こうから聞こえてくる。私はむぎわら帽をいじくりまわしながら、地図を片手に比較的整つた道を重いクツで、若やかに見せる必要があるかのように大股に歩いて行つた。私が考えていた場所で聞くと、そこは夜になると海水がかぶさるそうである。私はあきらめて先を急いだが適当な場所がない。そこで、先程の場所の傍に石垣でかこまれた海辺の高台があつたのを思い出し、そこの持主と交渉することにした。そこの人は快よく承諾してくれ水も貸してくれることになつた。やはり親切である。

早速港へ帰り皆と一緒に重いリュックを背負つてそこへ移動して、着換えの後キャンプサイト決定。テントの分担を決めると、あとは昼食をとるなり泳ぐなり、昼にクラッカーとジュース以外のものをとらなければ自由にした。テントの中は熱がこもつて暑く、すぐ泳ぎに出るものが多かつた。先生が砂浜で貝を堀り出

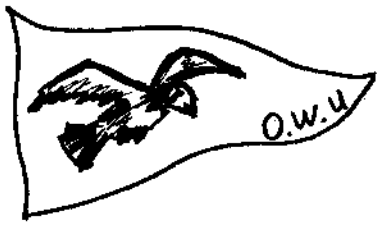
されたのを皮切りに皆が堀り出し、相当量の貝が集つた明日の朝食には貝が食べられそうである。

模倣文化財を観る

私は二時半頃から、河田、岩野、山内の諸君と、こむら返りの起つた足をひきずりながら、瀬戸田耕山寺へ出かけた。キャンプ地から丁度島の反対側にあたるので、かなりの道のりがあり、その時の私の足には相当こたえた。途中の道筋はほとんどみやげ物店である。観光客の浴衣姿が目だつ・さぞ他人が見ると、カッコイイ麦わら帽とショートパンツ姿の私達は異様に見えたろう。

さて、異様な門をくぐつて、入場料の高さに文句をつけながら石段をのぼり出した。ここの建築物は全て日本の有名な建築物を模倣したもので、日光東照宮の陽明門や、平等院鳳凰堂、石山寺の多宝塔等が、金色と、大理石とカベの白と、赤、緑によつておおわれている。本当にメモサメルヨウナウツクシサである。確かに華麗だ。しかし、私はこの美しさを目で楽しみながらも、心の中では全くこれに嫌悪の情をおぼえ軽侮の目鏡ごしにしか見てはいなかつた。

ところで、ここへ来て再認識させられたのであるが、いろいろな奈良朝や平安朝の仏像や建築物は、最初その多くが彩色されていて真新しく、当時の人はその美しさをほめそやしていたのである。それが、時間の重みにたえて今日に至つているものを私はありがたが つていたのである。もし、広隆寺の弥 菩薩が真新しくてピカピカしており、おまけに金色をほどこしてあるとしたら、あの大学生をして彼女の頬にキスしようと試みさせ得なかつたであろうと思う。アルカイックスマイルもあつた



さて、私達は、人おじしないクマゼみを手づかみでとりながらここを早々に退散しようとした。だが、まだポケットに残る硬貨の数枚を左手で感じながら右手でのれんをおして氷屋へ入つた。そこの氷のおいしかつた事といつたら、四人が共通の意見であることからも明る。

私達はこのクマゼミを持つて帰つて夏休みの宿題の昆

虫研究用に青貝店へでも売つたらどうかと考えた位にセミが簡単に手でつかむことが出来る。だが、これは動物愛護の精神を発揮してやめておくことにした。

帰りに打つた鐘の音が黄昏の瀬戸内海に流れて行くのを堂の中にいて考える時何とも言えないしんみりした感じに陥る。

私達がキャンプへ帰るといよいよ夕食のカレーライスを作りはじめた。釜造りから始めて作り終る頃にはもう暗くなり、懐中電燈の光で夕食を食べた。カレーライスは何とも言えない味である。食事の用意中にスイカを売りに来たので、瀬戸田港で買つたのに付け加えて買つておき、海水中に冷しておいた。

天体観測も行います

食事の後、空を見ていた時だれかが中天を比較的速く動いていく人工衛星を発見した。私は昨年の合宿においても能登半島木浦海岸で人工衛星を見ている。何が因縁がありそうである。

夜もふけて来た。私達は砂浜に集つてささやかなキャンプファイヤーをかこんだ。森重君の歌ういつかある日、山で死んだら……　という山の歌が、波音にさからつて美しく響る。時折、大きな波が来て、私達のファイヤーをおびやかす。スイカを月光の瀬戸内海をながめながら食べる時、舌の満足は頂点に達したようだ。今治で買つてきた花火の十連発が黒い夜空に消えて私達の集りに興をそえるに十分な役割をはたした。

この夜は通り雨におそわれたが、だいたい五時間は確保できた。朝は五時頃から起き初め、瀬戸内海の朝日が上がるのを見た。島の間からもれてくる太陽の光は大阪のよりも心もち透き通つている様である。食事当番に当だつていたので、早速昨日の貝を料理して早々に食事を切り上げ、テントをたたんで、その土地の持主に感謝しながら瀬戸田港へ急いだ。

敬虔な気持で

船は三十分もおくれて出た。しかし井ノ口港へは少ししかかからなかつたのでそれだけ時間を短縮できた。

松並木の続く道をぞろぞろ歩いてバスの停留所についた時、私はたえきれなくなつて長いズボンから、ショートパンツに変えた。実際暑い。汗が頭から水をぶつかけたように流れ出す。帽子に水を入れ、それをそのまま頭にふぶつた。こんな事が出来るのもこんな時だけである。二十分程して、バスが来る。バスは細い谷あいの道を、

段々畑を所々に見ながら進む。やつとガタガタゆれるバスを降りていよいよ大山祇神社の鳥居をくぐる。御広前は身のひきしまる様なおごそかな気をたたえている。しめり気味の上をふみしめて、一まず社務所にリュックをおき、若い神宮の説明をうけることになつた。拝殿へ入る前に、とてつもなく高い楠を数本見た。いずれも神木で、その中には日本最古といわれる大楠もある。この大山祇神社は、正式には日本総鎮守大山祇神社といい、祭神の大山積大神は伊勢神宮の天照大神の兄神で、後者が太陽神であるのに対して、前者は大地球の大霊神だそうだ。何にしろスケールが大きい。加うるに、官司の大祝安久宮司は八十代目で、日本最古の家系だそうである。

さて、拝殿に拝んで回廊を回ると国宝館だ。この神社は、全国の国宝、重文の八割までが集つているそうで、そのほんの一部がここに出されている。その陳列品中には、頼朝や義経の甲冑、藤原佐理の書いた船嶺、それに村上水軍ののぼり等があつた。ここの甲冑や剣の特色はほとんどが実戦に用いられたものであることだ。刃こぼれのあとが明らかに見えるのもあつた。剣の一本を修理するのだけで数十万円とか数百万円かかるそうである。ここにあるものを全部合わせればどれだけの価値になるか想像もつかない。

国国宝館を出て社務所に帰つてくると、皆少し疲れた様である。少し休憩した後、大山祇神社を出たが、すぐ前に茶屋があつたので乗議一決して氷を食べることにした。そこのおじいさんの話によると、私達の目ざしているコースは道が細くて、島の向うに出るのはむずかしいそうである。そこで、キャンプにおあつらえむきという入日の滝を紹介してもらつて、炎天の下草いきれのする田んぼ道をそこへ目ざして歩く。途中には全然木陰がなく、汗が服の中で流れているのが明らかに感じられる。その苦しさの中で、「何故にこのような苦しいことを自分はしているのだろう。」という疑問がわいたりもしたがそれを考える暇もなく、完全に干上つてしまつた川の堤に立つ松並木の下へきた。ここで昼食。クラッカーにジャムという簡単なもので済ました。滝まではそこから一キロ程しかなかつた。雨が少ないため水量はとぼしく、二本ある滝筋の一本はほとんど水がなかつた。しつとりとぬれたコケが日光に美しい。

渡り鳥の献立

すぐにテントを張つた。段々になつているのでテントも張りやすく早くかたずいた。その後は山と海に分れて適当に活動することにした。田中、紺谷、北村君達は海へ行き、私は河田、岩野、森重、津田の諸君と山の方へ出かけた。途中から道がなくなり、ボコボコに風化した花こう岩の山はだを登つていく。二三度すべつたが、あやうく傍の木をつかんで転ぶのをまぬがれた。少し上へ上がると見晴らしが至極いい。私達は上衣をぬいでしまつて、水筒の水をおもいきり飲んだ。松の木の間をぬけてくる快よい風が私達のはだにふれる。何ともいえぬスカッとした気分で、私達はすべる様に山麓を降りた。

夕食は八宝菜である。河村助席調理師による八宝菜の味はなかなかオツな所があつたが、ニンジン、ジャガイモが堅くて歯がたたない。食事後は滝のそばにファイアーをかこんで、昨日にまさるドラ声を山間にひびかせて思いきり楽しんだ。その日のスイカは前日のよりもおいしいようだ。何故だろう。やはりおいしいからだろう。

ファイアーが終つてからは例のごとくトランプをしたが、私は葉書を書いていておくれたにもかかわらず、勝ち進んで全てのチップの半分程を一手におさえたりもした。トランプは午前二時頃まで続く。私は途中でテントを出た。明かるい月があたりを照らして木々を黒々と浮び上がらせている。滝音が一段と大きくなつた様だ。空にまたたく星は都会で見るよりもよく輝いていて、数も多いように見える。Cテントがポツと明かるく皆の笑声がきこえてくる。

翌日は朝食をおえたのが九時を過ぎていた。私は食事後津田君と最初皆が先にきて泳いでいる海岸へ出て見た。水が非常に澄んでいて、泳いでいる魚が見える。いかにも心持よさそうだ。私達二人はくびすを返して官浦の町へぶらぶらと強い日差の中を歩いていつた。葉書を出してから氷屋へ入る。既してこの辺の氷は安くて多いというのが定評である。

島を離れる

帰つてみると皆の姿が見えない。ところが頭の上の方で声がきこえる。その方へ行くと滝の上で皆が水浴をし

ているのだ。丁度畳一枚程の広さで深さ二十センチの浴槽が水の侵蝕作用で出来ている。実に天然水風呂として最高である。そこで、私達は水をせきとめて滝に水が流れない様にして下の者をおどろかせもした。

さて、私達は昼食をインスタントのラーメンで済ましし私の反省を促がす様な出来事もあつたがとにかく、後をかたずけて入日の滝を後にした。そして宮浦港へ。そこで又氷屋へ入つたが、ここでは、はしご氷をする者が二三人いた。

予定より五分早く出た船は、ゆるゆると宮浦の港を出て、又島の間をぬつて一路本土の忠海へ。島々には赤と白でぬり分けられた、送電線だろう鉄塔が目だつ。呉線を走る汽車がマッチ箱のように見える。

そこから船はもう一度瀬戸田へ行き尾道へ向つた。観音山はいつも美しい。私達のキャンプ地が見える。山内君が帽子を瀬戸内海に風によつて棒げさせられた。私は森重君とデッキに出て瀬戸の夕焼をながめた。この時の夕焼はいままで見たどの夕焼よりも美しく見えた。空は真赤なベルトを帯びて、真青に私達をおおう。落ちかける太陽が海に映え、白波が帯びる紫色が神秘的である。私達二人はこの美しい光景に陶酔しながらも、上の甲板で何かを食べているのを聞きつけてそこへ行つた。彼等はクラッカーにチーズをはさんで食べていた。いままでクラッカーに少々あきを感じていたが、この時のクラッカーは潮風とチーズで非常においしかつた。この味は一生忘れないだろう。

そうこうするうちに船は尾道に着く。私達は勇んで食堂に入り夕食をとつたが、味はひどく悪くて、私達の方がまだましなようだ。

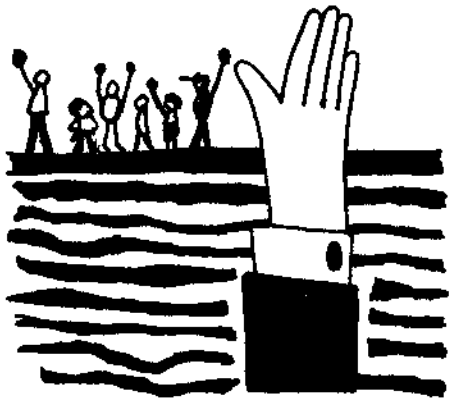
ロマンの街

すつかり暗くなつてしまつた中を私達は千光寺公園へ登り道を上つていつた。所々で視界が開いたが、尾道の夜景は素晴らしい。「暗夜行路」等の小説にとられているという先入観があつたからかも知れないが、実際尾道という町はロマンチックないい町だ。上から見ると、あたり一帯に電燈の光がちろちろともつていて、丁度尾

道水道だけが墨を流したように真暗である。千光寺には大きな岩がありそこには昔は何とか言う宝物があつて、瀬戸内海のそのあたり一帯を照らしていたと言うが、今も御ていねいに水銀灯がとりつけてあるのには驚いた。

私達は又氷を食べて駅へ帰つたが、皆はリュックサックをまくらに駅の前の歩道に足を投げ出して寝てしまつた。

私も少しねむたくなり出した時丁度汽車が入つてきた。ガラガラだ。これを岡山で乗りかえると反対に相当混んでいた。残念ながら私達は一緒の席に座れず、バラバラ



になつてしまつた。私は徹夜する意気ごみで窓の外の景色をながめていたが、いつの間にか寝てしまつたらしい。気が付いた時汽車はもう姫路を過ぎていた。

フィナーレ

そして、私達は遂に五時二十分、起点の大阪駅へガラガラのリュックとねむた目を伴つて帰り立つた。残念な様なホッとした様な感じである。

私はこの六百五十キロの旅を終えていろいろな事を学び、考えさせられる事も多かつた。失敗も多かつたが、楽しい旅である。

私はこの旅が私の高校二年目という大事な時にあつて私の一生の記憶の泉に楽しい旅としてよみがえり終ける だろうと一人思い、心のうちでほゝえんでいるのである。

＊＊＊＊＊＊

— 終 —

大手前回顧録

想い出話

岸上恭平

私は昭和十二年の六月に信州の松本中学今の松本深志高校から本校の前身大手前高女に転任して来ました。そのとき松本中学で五年生の立体幾何を教え中間考査の答案を調べた其直後の転任で大手前高女の五年生に立体幾何を男子用の教科書でやつておつたのを引継いだものですから同じ程度の教科書で進度も同じで不思議な符合でした。その一学期末の考査の答案を見て大手前の生徒がすばらしい頭の持ち主であることに全く驚きました。前任の松本中学は信州第一の中学で県下から優秀な生徒が集つておりましたがその成績に優るとも劣らない出来でした。普段の授業のときはあまり質問をしないので理解の程度がわかりませんでしたが一学期末の試験の答案を見てびつくりしたわけです。第一に字がきれい、女らしい細い端正な字でした。それまで男子ばかり教えてましたので男の子の乱ぼうな字を見なれている目には何ともすがすがしい感じでした。第二にはその出来具合いですが応用の問題までほとんど皆解いていました。もつとも女子だからと多少手加減した問題でしたがあまり出来すぎて配点に困りました。それで大手前を見直したというこれが赴任当時の想い出話です。

その当時教えた生徒の子供がもう十数人大手前に来ております。何しろ二十五年も経つているのですからもつともな話ですがやはり母親ゆずりで子供達も成績がよろしい。

戦争がはげしくなつた昭和十九年頃から大手前の上級生は牧方御殿山にある陸軍の化薬庫に動員しておりました。私はその動員部隊の責任者で大げさないい方をすれば、五百人余りの生徒の生命をあづかつていたわけです。空襲の危険から如何にのがれるか毎日そればかり心配していたのですが、幸いな事に一度も空襲に会わず職場で終戦の詔勅を聞いたときはほつとしました。重い責任から解放された喜びが敗戦の悲しさなどよりずつと大きかつた事のみ強く記憶に残つております。

旧制時代の卒業生がクラス会で金蘭会館にやつて来て先づ最初にいいますことは「校舎がきたなくなりましたね」ということです。当時は床を水洗いしてからオカラでごしごしとこすつてぴかつと光らしておりました。彼女等の多大な労力の奉仕が後かた無く消えているのに淋しい気がするのでしよう。長い廊下に長い列をつくりぴたつとすわつて空拭きしておりましたおさげ髪の後姿が昨今の様に想いうかびます。彼女等は皆今主婦として家庭の中心になつて子供の養育につとめているわけですが、「あの当時は半ば強いられた勤労でいやな気がしましたが今思い出してなつかしい又現在の生活にたしかにプラスになつている面もあります。」とも申しておりました。

以上

回顧

杉野　とし子

物心ついてこの方、戦争を道連れに歩いて遂に制服をぬぐまでに到つたわたしには、回顧のどの頁にも「尽忠報告」「滅私奉公」という語がぱちぱち躍り、おのずと心暗からざるを得ないが、そういう時代の渦中にあつた大手前の遠き姿の一斑を、なるべくは私見を交えず浮き上らせて、今回の余儀ない「大手前回顧」とさせていただきたい。

記憶の糸をたぐるに当り、まず入学の春の職員写真を開く。この春（昭和三十七年）まで校長だつた佐藤先生が、そこでは時の校長の左に、さながら脇侍のごとく侍つておられ、甚だ恐縮の体である。新任先生披露の図である。現教頭の岸上先生はそれから二ヶ月後れて着任なさつたと思う。わたしの大手前はそこから始まる。

正門も昇降口も今と変らない。運動場は今の南半だけだつたから、随分狭かつたわけだが、一学年二百名（但し五学年）の女世帯のこととて、怪我人もなければガラスも破れなかつた。別館には二年制の「高等科」があり セーラー姿の本科生に対し、今の女生徒のようなスーツ姿のお姉さんがいて、寄りつけなかつた。金蘭会館には一年制の「裁縫研究部」があり、これは優美な紫の着物紺のはかまをひらめかせ、淡い憧憬を抱いた。それらに挟まれて鳥のような本科生の生活があつた。

さて、授業が始まつてみて心はずんだのは、二三の教科の教室が、大変特色があり、独自の雰囲気を持つていることであつた。各時間移動式で、今の五ー八番あたりが英語、その横がずらりと数学、十一ー十五番が国語だつたと思うが、英語教室には発音記号と発声法とを図解したカードが行儀よく掲げられ、一歩入室するや、ペラペラと舌が廻転する突然変異でも起りそうな錯覚を与えていた。国語教室には、各人の机の中に列によつて漢和

広辞林何れかが備えられて、当初は早く引く競争をよくさせられた。国語はこういう大変重い辞書をバタバタさせてしらべるものだと、辞書の厚みから衿を正した。机の配列をコの字にしたこともあつた。書架があり、辞書、国語便覧、参考書の類がぎつしりつまつている教室もあつた。そこは休憩時間によく立ち読みに行つた。同じ国語でも五教室それぞれ模様、設備が違つていたことを思えば、各教室使用の先生が大体定つていたから、おそらく先生の意志によつていたものであろう。とにかくこれが新しい世界に飛び込んだばかりの心に学習意欲をかきたてた。自主的学習をやかましくいわれたが、やはりそれだけの考慮はあつたと、有難く思い出す。

夏、日支事変が起つた。戦色はたちまち学園に到り、精神教育が強化された。印象的なのは徽章の精神に関する訓話である。（徽章は学制改革で高校になるまで愛用せられてきたが、今の女生徒のがそれに近く現今のより輪郭に丸みがあり、勿論「高」の字はなく、座金は銀で上品だつた。）いわく、「本校徽章の形態をかたちづくる三角形は、知育、徳育、体育、即ち教育の三相を表わし、全人格的教育の理想を示す。勿論底辺が体育であり、知育、徳育の二線はその底辺基礎の上に築かれるべきものでなければならない。（後略）（学校長談）一同試験にそなえて、挙々服膺した。

一方、教育の精神的支柱として昭憲皇太后行啓記念碑の建設が進められた。（玄関脇に現存）出来てからは登下校時に全員之に最敬礼をするようになつた。之に関連して、行事関係では毎年行啓記念日の二月十六日に、全校伏見桃山御陵に参拝した。この日の記念写真は面白かつた。拝殿下のおびただしい石段に、最上級生を下に、上へ上へと千人を積み上げるのである。一年の時は折角買つた写真が、虫眼鏡で探しても遂に己の存在が分らずひどく人格を無視された気持になつた。更に、この日に近い日曜日には、国民会館で行啓記念音楽会が行われた。そういういわれの日である故もあつて、音楽のうまさだけでなく、ステージでの態度まで互に競り気があつた。

戦局は日々に深刻さを加え、大手前公園の勤労奉仕（清掃）もしばしば経験したが、はては女子ながら執銃教練をするに及んだ。まず五十挺の銃が購入され、男子校の配属将校に準じるような軍人の指導のもとに真似ごとに懸命になつた。しかし、真似ごとにしては銃はあまりに重かつた。この、近在他校におよそ類例を見ない試みの世評はさまざまであつたようだ。遠近からの見学者後を絶たず、それに応えるかのように、学校は父兄に向つて、「余りに時代に迎合していると考える向もあるかも知れず、余りに先端を切つてと思われる筋があるかも知れない。しかし学校では何も女生徒をして支那娘子軍の

真似をさす訳ではなく、形から内容へ、即ち其の精神を把握せんためである。（大手前学報）と理解を求めた。

こういう時代にあつても進学者は府下随一で、学校でも相当力を入れられた。大晦日にお餅をほうばりながら数学の問題に四苦八苦したことなど、有難くもなつかしい。

日支事変から大東亜戦争勃発まで、これがわたしの大手前生活であつた。

無題

下村米太郎

「大手前回顧録」などというテーマを与えられると、過去を美しく懐しいものにしてしまうのが当然である。従つて現在の美点も長所も、その発見に苦しみ、悪口雑言になり勝ちなのも已むを得ない。而し又これも何年か経つた時、美化され懐しい想い出の一頁になる筈だ。

昭和二十一年。終戦直後である。民主主義精神の溜々と流れ始めた当時の社会にあつても、まず衣食住の生活確保があらゆる人間の目標であつた　ガラスのない住宅電車、校舎、空地に僅かの菜つばやいもを作りながら、やつと雨露をしのげる住家から通勤した先生、父兄、生徒、何れも敗戦、いや勝戦であつたとしても同じ状態だつただろう。広島の原爆投下後僅か三ヵ月、焼開地から広島市に帰つてみてあの一望の焼原を見た時は、応仁の乱に歌われた「なれや知るみやこは野辺の夕ひばり、あがるを見てもおつるなみだは」の歌そのものだつた。

昭和二十一年本校に赴任したのは創立六十周年記念の行事の一翼をになう為でもあつた。村山校長は今は亡き人であるが当時の教頭が今年退かれた佐藤先生であつた。校舎を案内して下さつた先生の顔色も復員直後かよくなかつた事を覚えている。今のコートに不発弾がそのまゝになつていて、職員が大きい穴を堀らされた事、アメリカの兵隊が危険を省みず卓嚢を除した事なども今まざまざと想い起す事が出来る。

女学校から高等学校へ、そして職員、生徒の交流が行われた。第一回から第三回位の卒業生は男子は全く稀少価値があつた。いつの頃からかはつきりしないが、この十七年の間に（そろそろ悪口になる）生徒を比較してみると、先ず気品の良い悪いがはつきり感じられる。又教養があつた。教養といつているのはつけ刃的なものをさしてはいない。又外見上の事でもない。物事に対し適切な批判力を持つていたということである。礼儀も正しかつた。三年生になつても掃除をさぼつたりする者は少なかつた。一人になつても汗を流して働いたような、よい意味の豪傑がいた。器用な日本人は余り香んばしくない方面の同化吸収に更に器用である。而し君等を責めて

いるのではない。世の中の親等が怒るかも知れないが、学校教育は君等の生活の一日の時間の¼にすぎない。私も今二人の子供が本校にお世話になつている。家庭教育が、社会教育が、どれ程学校教育に、よかれ悪しかれ大きい影響をもつているかをつくづくと味わされている。教育は教え育てるものである。未完の大器（小林先生の名言）である諸君、一粒の種は死んでいない。今生に発展の新しい芽を出している。豊かな土壌と太陽、水が充分にあるとは思えないけれども、先に述べたような意味の教養ある生徒として成長される事を望んでいる。

それにしても校舎の老朽ぶりは悲しい。⅔のペンキによる厚化粧もどうなることか。又親子二代とつき合う日が近づいた事を考えた時も、出るは溜息ばかり……文脈乱れ文筆止まり暴言多謝というところ。

小説「友情」　成瀬　英一

「島田!!　しつかりするんだ！　きずはあさいぞ。島田。」

「酒井かおれはもうだめだ。行つてくれ、第七三二高地は占領したか。そら突撃ラッパだ。行つてくれ。」

「ばかな。貴様を捨てるようなら、おれはここで死ぬさ。待つてろ、すぐに傷の手あてをしてやるからな。」

「いや、行つてくれ。おれはおれの傷が致命傷だとわかつている。どうかおれなんかより国のために行つてくれ。」

「バカヤロー。そんな気の弱い事でどうする。死ぬのはいつでも死ねる。生きるんだ。」

「ありがとう。……思い出すなあ。貴様と知りあつた頃、そうだ。丁度、旧制中学だつたな。それから貴様は何かにつけおれを励ましてくれた。兵学校も軍隊も隊がいつしよになつたなあ。でも貴様とおれの関係ももう最後だ。長い間ありがとう。」

「また言う。バカのいくじなし。貴様なんか死んだ方が帝国のためだ。死んでしまえ。くやしいか。くやしかつたら起き上がれ。」

「貴様がおれを励ましそうとしているのはよくわかる。でも本当にだめなんだ。それより話をしてくれ。美しい過去の思い出を。」

「よしいいとも、がんばれよ。そうだ。葉子さん、貴様が死んだら葉子さんはどうなるんだ。おれ達は互に国のため、祖国発展のため尽すと約束したな。おれ達は祖国、祖国「日本」を愛しているんだ。彼女だつてそうさ。でも覚えているか。おれ達が呉を出港する日、見送りに来た彼女が涙をいつぱいためながら『私は祖国が勝つよりあなたが生きて帰る方がうれしいわ』といつた事を。葉子さんのためにも貴様は生きなければならないんだぞ」

「葉子さんか。葉子さんの事は貴様にたのむ。貴様とおれとは葉子さんをはさんだ恋がたきだつたな。それを貴様は退いてくれた。葉子さんと会うのを極力避けてくれた。従つておれが葉子さんを得た。後は貴様に頼む。幸福に、一生幸福にしてやつてくれ。

それに貴様とおれはよく意見を戦わせたな。貴様は資本主義、財閥を否定していたつけ。おれもだんだん貴様の考えがわかつてきたぜ。」

「すごい血だ。話すのも苦しいんだろう。静かにするんだ。今縛つてやるからな。包帯は？あゝ、あるはずはないな。よしつと。おれのシャツをちぎつてやろう。きたないが一時しのぎになるさ。本当にがんばつてくれよ。もうすぐ味方の陣地だ。」

「おろしてくれ。頼む。うつ！　少し休ませてくれ。おれが死んだら里にいる母に立派に死んだと言いきかしてくれ。おれは前から野菊のいつぱいさいているあの山一貴様も知つているだろう。あそこが好きだつたんだ。おれが死んだらあそこに墓をたててくれな。おれの胸の中には本当に色々な事が混ざり合い、今死ぬような気持がしないのさ。貴様の腕に抱かれて死ねるとは。あゝいい気持だ。おれと貴様と葉子さんと三人でいつも歩いた峠の道、あのお地蔵さんを覚えているか……？　楽しかつたなあ……貴様泣いているのか。涙なんて見せたことがなかつたじやないか。さあ、おれの旅立ちだ。笑顔で送つてくれなあ。」

「島田!!」

「笑つてくれ。いつも見せたあの笑顔をもう一度見せてくれ。おれの最後の心残りはおれがここで死んだ事が不当に国に役立つたかという事だ。でもいいんだ。おれは日本が心の奥から好きだつた。好きな者のために死ぬ本望さ本当に葉子さんを頼むぜ。」

「心配するな！貴様の、貴様の言つた事はおれが死ぬまで。いや、あの世で貴様にめぐり会うまで忘れないさでもなあ。生きてくれ、生きてくれ。島田!!」

「ありがとう。じやさようなら。お迎えが来たらしいぜ。うつ！　天皇陛下万才　―　大日本帝国万才　―　おかあさあ！ん。葉子さあん……。」

「島田、島田。島田!!　島田!!」

詩

挑戦

加島　文

俺は貴様に挑戦した
頭を下げて　腰を低くして
貴様の胸めがけて
思い切りぶつかつた
ガツーンと音がしたが
簡単に横に投げられてしまつた

コンチクショーと思つて
又　突進した
今度もゴツーンと頭を打つただけで
貴様は身動き一つしなかつた

突進　突進　……

突進するたびに
俺は投げられ
砂を喰わされた

幾度めかに
俺は身体（からだ）全体に、しびれる程の強い衝撃を受けた
俺と貴様は四ツ組み合つたのだ
「しめた」という気がした
しかし一寸もみ合うと簡単に
横に投げ出されてしまつた

とうとう俺の顔（ひたい）は割れ
顔は血だらけになり
その上砂をかぶつていた
目は真赤（まつか）に充血し
口からはどす黒い血をたれていた
服はボロボロで
身体中傷だらけである

しかし俺は大地をけつて
突進した
動かない身体にむち打つて
突進した
ただ惰性でのみ
突進した

俺の目には
貴様のその憎々しい姿しかなかつた

何回めか
ぶつかつた俺の前から
貴様はスウーと消えてしまつた

俺はくやしかつた
そしてあの真赤に充血した
獲物を探す鷹のような目で
貴様を探した

しやがれた
声にならない声で
貴様を呼んだ

ドコダー
ドコニイルンダ
サア　出て来い
かかつて来い
バツキヤロー
俺が恐しいのか
貴様が来なくとも
俺は行くぞー
俺は行くぞー

俺があんなに怒鳴つても
貴様はとうとう出て来なかつた
俺はくやし涙を流した
本当にくやしかつたんだ

俺は今まだ貴様を探している
再度の挑戦をするために

詩

晩秋の歌

金田博志

あでやかに
紅葉の
降る溜息ぞ
末枯も
行く人ごと
いやはやに
早事なりき
君が心の
白雲に
絶へてつれなき
晩秋の身や
君が別れの
御言葉は
剣となりて
我胸を刺し
およびもつかぬ
灯に

初木枯しの
たばしりぬ
時雨心地ぞ
我のみか
生駒の峰に
糸すすき
白波に
なよびなり
まをごもよ
十六夜も
哀歌流るる
夜の雲
流離ひて
何処にかある

一九六二年十一月二十三日

孤身

金田博志

空堀に栄華残らず
柔かき初秋のそよ風は
子の知らぬあけの調べに
舞いながら
叢草を撫で
心なく飛ぶ白鳥に
流浪せる異郷を語り
りんりんと孤故の子に
物はせず　去りゆくのみか

子は母を　常　石垣に
雑草をしき　浮つ沈みぬ
玉の緒を　やよそよ風よ
たずさえて　よみじに通い
心して　母が便りを

忍草　御心あらば

もととなせ　春に散りたる
子が母の　堅き良き実を

あけの星　残月にかかれる
ちぎれ雲　新しき朝
野辺の身に　吾木香散り
つれづれし　たわめる松の
声静か　古城のほとり
愛し母の　在りしを偲び
まなざしの濁りて消えず
孤身の苦しきを知り
永久にある　あけの陽炎やむ

トの道に　牛車のわだち
子を忘れ　深き印しを
残すのみ　やよ白鳥よ
戯れよ　母をなくせし
子と共に

やよとこしえに
やよとこしえに

一九六二年九月四日

論文

死ということについて

砂田良一

今日ある友人から手紙が来た。その手紙にはクラスメートが自殺して、改めて自分たちのもろさに気付かされた。そして死というものの怖しさを再びひしひしと感じた。と書かれていた。そこでぼくは自殺 ― 死ということを考えてみた。

〃死〃このことばはいくらなんといわれても無気味な響きを心の底に低く太く残す。怖しい。何と言つていいのかわからないが怖しい。でもぼくは〃死〃について一体何を知つているのだろう。死んだら心臓が止まり、やがて肉体が消滅する。意識がなくなる。それ以外一体何を知つていよう。それだけでもはつきりと自分に納得させられるだろうか。霊魂の存在がないと頭で割り切つても、なかなか想像出来ない。英語のテキストに、子供が暗い所を怖れるようにおとなは死を怖れると書かれていた。この比喩は全くすばらしいと思う。今のぼくは死ということについては全くの無知といつてよい。×××全くの無知な所から死を、一体どうして考えることができよう。それはただ漠然とした怖しさでしかない。しかもそれは確かにさけることのできない怖しさなのだ。全く無知な自分が死について考えそして悩んで大切な生を失なう。自分はこんな矛盾をおかしてはいないだろうか。死について想像せざるを得ない。しかし、それよりもっと大切なのは、この無限の可能性をもつ自分の〃生〃を充分に力一ぱい生きることではないだろうか。ぼくは今生きるということがどんなに美しく豊かなことであるかをひしひしとはだに感じる。どう表現していいのだろうか。とにかく〃すばらしい〃ということばがはちきれるくらいすばらしいものだと思う。そしてぼくは自分が明日死ぬかも知れないからこそ今を精一ぱい生きたいと思う。今日という一日は明日のためにのみあるのではない。明日を期して生きることは大切だ。しかし今日は出来ないが明日になつたらやろうと思つてせつかくの一日を無駄にすごしたことがどれだけ多かつたろうか。もつと大きくとらえるなら、高校へ入つたらと中学時代に思い、今又、大学に入つたらと思おうとする。しかし大学へ入つても社会へ出たらということになりそうだ。ぼくは今この悪いクセを直さなければならない。高校三年の十一月。しかも単位さえ危ないというせつぱつまつた自分であればあるだけ今の生活を充実し、この弱点を克服しなければならない。ぼくは勉強も一生懸命やらなければならない。しかし可能な限り本を読もう。みんなと話をしよう。一緒に歌もうたおう。ぼくは明日死ぬかもしれない。このことを充分かみしめるべきだ。そして今死んでも自分はあれでよかつたのだというふうな又明日死ぬというはめに至つても今の状態を少くとも基本的な所だけはつづけられる。というふうな生き方をしなければならない。

幼年

神保光太郎

きこえるのは　松風ばかり
みんな　子供達であつた
風が　あたまのいただきに　渦巻いては
思いを　残して行つた
墓場には真赤い実が熟れ
あそこを出ると海
乳臭い郷愁が　胸をいつぱいにした
ことばが　、
噴煙のように立ちのぼつてきた
歌が　口を突いた
みんな　すなほに合唱した

小説

黒犬だけが知っていた

津生志賀造

ある日の午後、公園のベンチに一人の男がすわっていました。一時間、二時間たっても立つ気配はありません何を考えているのでもなしに、何か心を静めているようでした。人の来るたびにびくびくしながら。私が近よってみたのは三時すぎでした。実をいうと私はその男がなんのためにそこにそうしているのか知りたかったのでした。ところがその男は私が近づいてもわなわなとふるえるだけでした。そこへ一匹の黒犬が近よって来ました。その男はますますふるえだしてベンチより立ち上がりました。顔はみにくくゆがんで今にも泣き出さんばかりです。私は先ず男を手で制し、ベンチへ坐るように合図をしてから石を拾うとそのよどれた犬に向って投げつける格好をしました。私には始めからそれを投げつける気はなかったのですが（実は私は犬がかみつきはしないかと内心こわごわだったものですから）幸い犬は私の格好を見ただけでどこかへ消えてゆきました。そこで私はまたぶるぶるとおびえているその男を促してベンチに坐り、口を切り出しました。「君は一体ここで何をしているのですか。どうしてそんなにおびえるのです。何かあったのですか。わけを聞かせて下さい。」私のやつぎばやの質問に男は口をもぐもぐと動かしただけでした。

そして答える代りに今度はおどおどした小心者のような目でじっと私を見つめました。私は背すじがぞっとするのを感じずにはいられませんでした。何をかくそう、彼こそはあの美しい尚恵さんを愛し、恋し、そして尚恵さんの親からいやがらせをされ、そのはてには気が狂ってしまった男だったのです。昭和二九年一月二十日の夕刊に、この哀れな男の日本アルプスでの遭難が報道されたのです。しかし彼はあのうすきみ悪い服装とひふの色と目とで私の前のベンチに坐っているのです。私は心を落ちつけて、もう一度前の質問をくり返しました。「どうしてそんなにおびえるのです。何かあったのですか。私は顔を確かめたかったのです。すると彼は頭をあげ、私を冷たい眼差で見て、スッとベンチを立ってウフフフと笑いました。あゝどうしたことでしょう。「やつぱりこの男は気が狂っているのか、それともわざとこんな風をしているのか、彼には私が誰だか判っているのだろうか。」私は暫く言葉につまってじっと彼の顔を見つめていました。ところが気がついてみると今まで冷たく笑っていた彼の顔がいつの間にかもとのおどおどした顔にもどっているのです。私はようやく気を取り直してもう一

度尋ねました。「あなたはここで何をしているのですか誰かを待っているのですか。」「はい、夢を待っているのです。」男は初めて答えたが、私はその答を聞いてブルブルッとふるえそうになりました。しっかりしなきゃいけない。ここで負けちゃいけない。気持は漸く焦りさえ伴って来たようだ。彼はブルブル震え乍ら尚も言葉を続ける。「八年も前、穂高の滝谷は今のように人が多く集ることもなかったようですね。ひとりで冬山を行くことの危険性、それを知らなかったでもない彼でしたのに。その彼がアイスフォールを見物に行って死んだんですよ。遺体は数員の救援隊の出動にもかかわらず、ついに万年雪の下かどこかに消えたんですよ。」彼が彼を彼と言っているのは、どまかしているのでしょうか。彼は本当の彼ではなく、彼の従兄弟か何かなのでしょうか。私はじっと彼の顔を見つめながら、又例の黒犬が視野に入るのを感じました。彼のふるえは悲しみなのか、喜びなのか、何なのか判りません。何をふるえる程に苦んでいるのでしょうか。黒犬が近寄ってきたのを見て、彼は又ふるえ始め、とうとうさけび声を上げました。「助けてくれ。私じゃない。」私はきつねにつかれたようにきょとんとしておりました。黒犬はそのようすを見てほえだしました。その男は増々大声を上げて呼びました。「私じゃない。助けてくれ。」私は、その男がそんなにおびえる理由は何かということを一心に考えました。その間に、その男はどこかへ行ってしまいました。私はすぐに新聞社に行き、八年前の新聞を見ました。私は私の推測がだんだん実現するのを驚かずにはいられませんでした。私は翌日、滝谷に出かけました。八年前の出来事に深く興味を持ち、どうかしてこれを解こうと思ったからです。行ったのは私と数人の人と例の黒犬でした。その黒犬が役に立つかどうかは疑問だったのですが……滝谷につくと、私は一人の老人にあいました。そこで八年前のあの事件の場所を知らないかと聞きました。運よくその老人はそこを覚えていて案内してくれました。そこでその黒犬をはなしました。その犬は突然走り出しました。私は後を追いかけるのに苦労しました。ところが、どうでしょう。その犬は元来た道をまっしぐらに戻り、先程の小屋まで来ると急に止ったのでした。私は驚きました。そこで私達はそこをほりかえしてみました。一時間程して、だれかが大声をあげました。「骨が見えるぞ」私は私の推理がとけていくのに少なからぬ喜びを覚えました。しかし、その犬はなぜそれを覚えていたのでしょう。二、三日たって、新聞は例の男の自殺を報道しました。その記事は新聞の片すみに小さくありました。

〃「男の自殺遺体、見つかる」昨日、公園の木に首をつって死んでいるのを、勝井田吉子さん（二十才）が見つ

けて警察に届けた。そのポケットからは八年前の日記が出てきた。〃

私はこれを読むとすぐ、私の車に乗つて警察へ行きました。そしてその日記を見せてもらいました。それは普通の大学ノートで、表紙はよごれて黒くなつてしまつており、かすかに「日記」と言う字が見えるだけでした。私はすぐに開いて見ました。

一月十八日　晴

やつと穂高までやつて来た。あの男と一緒だ。アイスフォールを見たい見たいと言つて私に案内をたのんだのだ。黒い犬といつも一緒だ。気味の悪い犬だ。

一月十九日。雪。仕方がなかつたんだ。彼は「このロープを切るからナイフを貸してくれ」と言つた。私は「ほら」とポケットからナイフを出して、刃を出して彼の方につき出した。彼はこつちへ来て取ろうとした。運が悪かつたのだ。本当だ。知つていてしたんじゃないよ。なぜかはわからないが、とにかく床にくぎが打つてあつたんだ。彼はつまずいて倒れた。突然の事だつたので、のける間がなかつたんだ。彼はよく切れるナイフの上に倒れ、ただ「ウウ」つと言つただけだつた。血はどくどく流れ出した。まるで水道の蛇口から水が出るように……彼の顔は真青で「助けてくれ」と言つているようだ。私は声を出そうとしたが出なかつた。彼はもう助かるまい。彼はあんなにも苦しんでいる。こう思つた瞬間、私は彼の胸に刺さつているナイフを抜いて彼の首へ思いきりそれを突き刺した。私は何もわからなかつた。気がつくと、一匹の黒犬、そうあの黒犬が私の横の方で私を注意深く見ていた。私は小屋の前に穴をほりだした。「深く深く。少しでも深く」と思いながらした。それから死体を引きずつて来てその穴に埋めた。雪は私の仕事の邪魔をしたが、私は夢中だつた。そして仕事をすましまわりを見るとあの犬がこつちを注視している。私は積もつた雪を丸めてその犬に投げつけた。そして小屋に飛び込み、火をたいた。火を見つめていたら、赤い炎が彼の血潮を連想させ、私を苦しめた。ああ、私はどうすればいいんだ？？あぁ、だれか私を助けてくれ。

私はこれを一きに読んだ。

あれから一ケ月私は悪夢にうなされつづけた。「私はどうすればいいんだ？？？　ああ、だれか私を助けてくれ。」男の叫びが聞えてくる。「私はどうすればいいんだ？？　ああ、だれか私を助けてくれ」男が夢の中に私に呼びかけてくる。何度も何度もくりかえしくりかえし

呼びかけてくる。私の心も狂つてきた。あの男はもう一人の私だつたかもしれない。私は大きな声で「助けてくれ」とさけびたい衝動にかられて目がさめることがたびたびあつた。私は今悩んでいる。なぜ、なぜ、他人のことでこうも苦しまなくてはならないのか。ああ、黒犬よ帰つてきてくれ。おまえはいつたいどこへいつたのか。私のこの苦しみがわかるのはおまえだけだ、ああ、おまえだけが知つているのだ。黒いお前だけが知つているのだ。

終

「珍・女の一生」

小路　実

娘――一生のうちで一番良い時代。
独身で、皆からちやほやされて
本当に良い女

嫁――結婚すると家をもつて、そろそろ財布のひもを締め出す。

嫁――嫁の時代が過ぎると、ぬかみそくさくなつて鼻についてくる。

姑――そろそろ古くなつてガタがくる。

婆――年をとつて顔にしわが寄つてくる。一面の大波小波。

これが女の一生、南無阿弥陀仏！

或る教訓

水島

先日、カナダから旅行に来られた或る中年の男性と[redacted]を過ごしたのだが、彼は、ブリティッシュ、コロンビア州に住んでおられ、大きな農場の主です。実を言うと四十年前に日本から移住した人の一人なんです。日本語は殆んど記憶ないそうです。僕が最も感心したのは、四十年前に日本で十分な英語教育もなしに、急にすつかり違つた環境にしかも一人で放り出されたのに耐え、努力し、そして、今日の地位を築き上げられた事です。顔にはその四十年の苦悩がありありと浮かんでいました。今次大戦中敵国人として取り扱われたのが最も辛いことであつたと回想しておられた。我々の父母、兄や姉と違つた戦争の苦しみを受けられたのです。外国人と聞けば博愛の人と感じてしまうのであるが、同じ人間である以上、同じ感情を持つのは当然であるでしよう。言葉にしても、"Only one dictionary!"　と何度も繰り返されました。上役の人に　"Do this!"　"Do that!"　という言葉を覚える、口でいう程容易なものではないと思います。最初の障害がこの言葉の違いと思うと異国の地でこれだけの地位を築き得たのは、忍耐と努力の言葉に尽きると思うのです。

創作

幻想

山本春樹

あたりは一面の花畑、遠くにかすむ山々、静かな音楽をかなでる小川。私は一歩一歩大地をふみしめて歩く。鈴をふるような小鳥の声は、やさしく私に呼びかける。

「歩きなさい。歩きなさい。まつすぐに行きなさい。」

私の心は期待と喜びにあふれ、足はリズムにのる。

やがて、森へさしかかる。小鳥は私の頭上を飛びかい私に呼びかける。

「歩きなさい。歩きなさい。まつすぐに行きなさい。」

私の心はますますはずみ、足はますます軽やかになる。一歩、一歩、大地をふみしめる。道は右へ曲り、左へ折れる。どこからか霧がわきだしてくる。つめたい風が、私のほてつたほおかすめる。なおも小鳥が呼びかける。

「歩きなさい。歩きなさい。もうすぐです。」

私の心は喜びに満ち満ちてくる。歩け、歩け。霧がますます濃くなつてくる。

どこからか、犬の鳴き声が聞えてきた。

「ここですよ。ここですよ。」

まるで私にそう呼びかけるように。

私は前方を注視する。白い犬がかけてくるのが見える私はなおも前方を注視する。霧が私の視界をさえぎる。

私はさらに二、三歩あゆむ。見えた。長い髪、つぶらなひとみ。彼女は目の前に現われた。

「長いこと待つた?。」

私はやさしくささやきかけた。

「ウウン。」

彼女は、ほほえみかけるように首を横にふつた。

二人は歩きはじめる。白い犬は前へ行き、後へもどりうれしそうにかけまわる。私は喜びの絶頂にあつた。うれしかつた。楽しかつた。肩はときどき触れ合い、風になびく彼女の髪は、私の紅潮したほおをなでる。

いつか大きな湖のほとりにでていた。

「湖のむこうはどんなところかしら。」

私はとつさに何もいえなかつた。彼女はまた言つた。

「湖のむこうには、このような幸わせな世界があるかしら。」

私はうれしかつた。私は彼女の顔をみた。彼女も私を見た。長い髪、つぶらなひとみが美しい。

「がんばつてね。」

彼女は手をさしだした。私は彼女の手に私の手をかさねながら言つた。

「ウン。」

私の心の中に新たな決意がわきあがつた。これからの戦いのために。

寂

高光真

彼はポツンと立つていた
なにもなかつた
なにも
目にうつるものは踏みしめてる大地だけ
いや大地であるか
それさえもわからない
広々としたところ

彼はじつとしていた
じつと立つていた
地平線をうつろにみやり
何かを感じながら

夕焼けがきれいだつた
まつかだつた
陽はしずみ
色だけが残つていた
燃えるような激しさで

彼はふらつと動いた
夕焼けの方に
それだけだつた
「淋しい」
彼の目がそういつていた

影が長く伸びていた
それはどこでもなく消えていた

彼は涙をこらえた
その目に澄んでいた
淋しげに地平線をみつめながら
一歩一歩進んでいつた

夕焼けの中に
黒い影が浮び
次第に小さくなつていつた

……

静かな夕暮れだつた

無責任航海記

伊加礼太

午前八時二十分僕の乗つたクウイーンメアリー号は横浜港を離れた。誰も見送りには来ていなかつたが何となしに、他人のテープを二、四本失敬して、手を振つていた。大きな船体のせいか、岸べきが離れていくようだ。港の水は真黒だつた。いつまでも甲板で手を振る必要のない僕は、一番下の三等船室に降りて行つた。一等船室ちがい、三等船室へ通じる階段はうす暗く急だつた明るい所から、急に暗い所へ入つた僕の目は、何も見えなかつた。でも船室へおり切つた所で、真白いかたまりが目に入つた。何と思う？真白いドレスを着た美しい女性が僕の前にいた。はきためのようだつた。僕は、何とか口実をつけて話しかけようとした。だが、足はがくがくして、ボーとなつてしまつた。

「何をしていらつしやるの？」

僕は自分の耳を疑つた。

「何故ぼうつとしているの」

「……。あの……」

「ここは暗いですのね。上甲板へお行きになりませんか。」

「……。ええ。」

彼女は腕をさし出した。僕はその腕を組んだ。二人は階段を登り始めた。宙を登つているような気持だ。

「どちらへいらつしやるの。」

「えつ、ええ、香港へ。」

「お嬢さんは。」

「どこでしよう。」

彼女はいじわるそうな目つきで答えた。

「香港いやシンガポールあたりかな。」

「フフフフ……。」

上甲板を歩いているとだんだん心が落ちついて来た。海の風で頭が冷えた所でもう一度さつき言つた言葉を思いかえしてみた。そう、「香港、シンガポール」よくもまあでたらめなことが言えたものだ。この船はその方面には行かないのに……。何故僕があの様な事を言つたのだろうか。それにしてもこの女の背の高い事。ある威圧感を感ぜずにはいられなかつた。きつい香水の香のする女……一時間も二時間も一緒に居たら恐らく陥落したであろう。しかし幸いにも、突然彼女が申し訳を言つて僕の傍から離れた。僕はフーッと大きく深呼吸をした。

午前九時頃だつたろうか。再び自分の船室に戻つたのは……昨夜北海道を出て、休む間もなく横浜へ急いだせいか疲れが一度に僕を襲つた。スーツケースから空気枕

を出して横になつた。……どの位たつたのであろうか居心地が悪くなつたようなので、目がパッと開いた。かなり船が揺れているようだつた。恐らく嵐にでも入つたのだろうと考えて、煙草を一本取り出して吸つてみた腹の減つているのに気がついた。食物を補給せねばならないのは当然である。煙草を床にもみ消して、スーツケースの中から例のものを取り出して、例の如く例のことをやり始めた。につまるのに相当時間がかかるので、ふらりと何処かへ出ようと思つて立つた時に誤つて例のものを引つくり返した。さあ一大事雑巾はないし弱つていた所へ先程の女の人が今度は黒の衣装でぬッと雑巾らしきものを渡してくれた。それで後始末は何とかできた。礼を言おうと顔を上げたら彼女はどこにも見えなかつた取りあえず食堂で飯を食べた。甲板へ上つてもどうせ雨が降つていて駄目だろうと思つて自分の船室へ戻つた。時計を見ると、八時二十分、何もすることがないので、寝る事に決めた。これで航海第一日は無事終了

翌日は昨日とはうつて変つて、好天であつたいわゆる航海日和であつた。甲板に上ると、昨日は興奮の為か気が付かなかつたが、外人の多いのに驚いた。外人が多いのに驚くのは如何かしているが、矢張自分だけ大洋の上に一人ぼつちにされたような気がした。海は無気味な程静かであつた。どの方向に進んでいるのか見当もつかなかつた。三ケ月振りに落着いた気持になれた。収りず、朝飯をとつて、再び甲板に出た。若い外人のカップルが海をじつと見ている。海を見て何になるのだろうと野暮なことを考えた。僕はそのカップルに近づいた。近づいてどうしようというのであろうか。自分でもわからなかつた。

"May I speak to you?"

僕はいつた。そのカップルはこちらを見た。どうしたというのだろう。その夫人の方は例の女にそつくりだ。次に言う言葉が出なかつた。僕たちはしばらく向いあつていたが、こう云つた。

"I'm sorry I have mistaken you for a friend of mine"

そして、船室へ帰つた。何が何だかわからなくなつて来た。食堂へ行つて昼食をとつた。隣には例の女がすわつていた。自分はある仕事のためにこの船にのつているのだ。あの様な女とかかわるのはよそう。と、思つた心といやそれでしても何という美人だどうかして近づきになれないものか、という心が僕の心の中で争つた。そんな気持をよそに彼女は上品な手つきでスープをのんでいる。僕は急にたちあがつて船室へ戻つた。

幾日かの後、船はブエノスアイレスについた。僕は船をおりた。あの女も降りたようだ。女はすぐまつていた

車にのりこんだ。僕はタクシーをひろつて女のあとをおいかけた。女の乗つた車は、町を出て砂漠の中へ入つていつた。車はサボテンの林の中を飛ぶ様に走つた。やがて、岩山ばかりの所へきた。大きくカーブを切つた所に大きなほら穴があつた。そして車はとまつていた。「あつ」。と思つた時はおそかつた。僕の車は一斉射撃をうけていた。僕は火だるまになつた車の中からはいだすようにころがり出た。そこには、あの女が立つていた。

「追いかけてきたのね」

「ここはどこだ。そして、君の正体は何だ」

「ここは革命軍の司令部よ。私がその司令官なの。あなたは、ここの機構を知つてしまつたから、もう、町へは帰れないわ。そのかわり、大事にかわいがつたる。」

そして、私は武器をもつた男の監視のついた厳重な牢へ入れられた。その夜、暗がりにまぎれて私は逃げ出した。そして、コンドルと昼の太陽に悩まされながら、歩いているうちに倒れてしまつたのです。意識を失つて倒れている僕はとある旅人に助けられ、命からがら帰つてきました。

どうしたわけか、帰りもクイーンメアリー号だつた。あの船室へ入るのがいやで帰りは二等にした。でも、あの三等室の前を通るたびに、背筋を何か冷たいものが走るのを禁じ得ませんでした。

（完）

存在

草野心平

金色のかすみのなかの。
かすかなふくらみ。

茎と。
花との。
垂直の。
在。

金の虚空に。
二つのまろみ。

「詩集」より抜萃

Aの日記から見る

吉村正

師走に入つて間もない頃、学校は附近の映画館で上映中の映画を映画鑑賞に指定した。

Aは木枯しを受けながらも、ほのかなよろこびを、感じながら急いだ。映画は始まつていた。生徒の人ごみの中にはAはB子を捜し求めた。くらやみで人を捜すのは並の努力ではない。やがて飽きて2階の前部に席をとつた。

男が犬を抱いて、断崖に立つたシーンで映画の一本は終つた。Aは明かるくなつた内で、ふりむいた。B子は彼の後に座つていた。しかしAは一瞬ためらつたが、そのまま席についてしまつた。

B子は、背は低く、丸顔でいつもほほえみをたたえていた。ソプラノで話かけられる時、Aは顔のほてるのを止めることはできなかつた。彼がふるえる胸を抑えて、手紙を始めて書き送つたのが一年前だつた。友にかくれて、およそ単純な交際を複雑にとらえてつづけていた。

しかしこの二人に、おもいがけないちん入者があつた。不良生徒の親分格の吉村を、AがB子は吉村のタイプが好きだという事を口外したのが、いつか吉村の耳にはいつていたのだ。吉村はそれを大きく解釈し、B子に接近していつた。日毎にうわさにのぼる率が高くなり、Aを不安にさせていた。

今もB子の隣りの席に、吉村が六、七人の子分格を、従えていた。Aをためらわせたものは、それだつた。

二人（B子と吉村）は楽しげに、少なくともAには、それ以外には見えなかつた。

やがてB子は席をたつた。吉村が動かないのは、B子が、休息にでるだけのためらしい。AはB子についてでた。

人々のいそがしく行く街角をAは歩いていた。もちろんB子と共に、彼女をそのまま外へ誘つたのである。

「気にさわつた？……。」

B子はうつむいたままつぶやいた。

「でも、きょうのわたしは…。」

と言いかけてやめた。

「おこつてる？……。」

「いいや、別におこつてはいない。」

沈黙が続いた。いつか町はずれにかかつていた。町の外は山と平野に囲まれて、山は公園になつていた。二人は公園のベンチに座した。

「この間のお誕生日に、贈り物をいただいたの、それ

が宝石よ。驚ろいちやつた。」
Aには贈り主が気になつて、たずねた。
「母に聞くと、わたしの許婚ですつて、……」
「許婚？　」
Aはおもわず叫んだ。
話しは進まなかつた。しかし彼女はあまりにも古典的でありすぎた。母の定めた許婚を認めてしまつたのだ。Aは説得を試みたが、全て無駄だつた。挙句に彼女は、Aとの交際を将来に災いを残さない為にと、やめたいと言いだしたのだ。Aには急激なショックでありすぎた。なすすべも見あたらず、ただうつむいて、頭をかかえてしまつた。B子はいたたまれなくなつて、
「帰るわ、さようなら。」
と、去つた。

苦心は永い時を要した。思わず、
「バカヤロー　。」
とどなつて泣きだした。
陽はすでに落ち、やみにネオンが、映えていた。冷たい木枯しが木々を騒がせ、Aの顔を鋭どくさした。星も雲にちぎれ、月はその光をにごらせた。
時はまたたく間にすぎた。
玉川はAとはあまり親しくなかつた。しかし、玉川がクラスメイトを、別荘に泊めているのを知つていた。
遊び仲間には、かつこりの事だつた。夜中すぎまで、レコードに、トランプに時をすごしていた。
Aは玉川の別荘へきていた。夜中をすぎている。すでに皆寝込んだらしく、暗かつた。
Aは呼鈴を力づよく押した。遠くで鳴る音がするのに気付いた。人の気配がした時、Aはとつさに垣根に隠れた。顔をだしたのは、玉川だつた。キヨトンとした顔でけげんにのぞいていたが、又、ひつ込めてしまつた。
数度Aは繰り返した。クラスメイトも顔をだして、いたずら者を捜し始めた。その中へ悠然とAは入り込んでいつた。彼らの不満を聞き流しながら、寝床をとつて、疑問に満ちた視線を無視しながら目をとじた。
失恋を初めて感じた複雑な心持を抱いたままに。

失恋の次の日の日記に

生駒山御心あらば
もととなせ春に散りたる
この初の実を

と、書きつけてあつた。

演劇部内幕

演劇部

「誰が入部してくれないかなあ。」これが、我演劇部の本音である。現在一年生部員男子三人女子六人、二年部員男子三人女子二人である。「何故入部してくれる者がいないのかな。」「演劇と聞いて、何かむづかしい、特殊なクラブの様に感じて恐れていると違う。」そう思つておられる方が多いのかも知れませんね。では、活動や、その他もつとクラブを知つてもらいましよう。週一回～二回の部会、この時、基礎練習をみつちりやります といつてもテキストに従つて、(1)呼吸体操　(2)呼吸調節 (3)発声　(4)アクセントをやるだけの事です。(1)は、はいたり吸つたりする事を工夫したもの。(2)は、吸う時間、はく時間を長くしたり短かくしたり、(3)は、声を大きく、よくとおらす練習、(4)は、歯切れよく話す練習、(5)標準語のアクセント練習、たまには方言も。等、これがすめば、みんなで楽しく雑談をやります。練習中も少しもかた苦しいことは、ありません。そんな日が続いて、文化祭等の行事の二～三ケ月前になりますと、部員ははりきりだします。脚本の選定、配役、スタッフを決め、自分の与えられた仕事をどんどん進めていきます。皆、演劇が好きなものばかりですので、一致協力し、互いに盛り上げていき、いかに効果的な劇ができるか研究しあいます。ある者は、自分の役で、ある者は、照明の点などでそうです、演劇部とはこのように楽しいクラブなのです。演劇に興味を持つている者なら、誰でも楽しめるクラブです。そりやたまには、つまらない事があります。しかし、皆はへこたれません。演劇が好きだからです。我々は行事の当日に近づくほど興奮していきます。当日は、「あの小道具はあるか」とか「ライトいけるやろな」とか、心配したり、そわそわしていますが、劇が始まると全精力を集中して劇を創造していきます。失敗もあります。しかし、全力でやつたという事に意義があるのだと我々は思つています。皆さんに、楽しんでいただけ、何かを感じていただけるならば、それで我々の使命の一部は達しているのだと思い、常日頃から部員同士で研究し合い、前進を続けているのです。ですから、皆さんの中で、演劇に興味をもたれ、一度演劇の仕事をやりたいと思われる方は、我々と共にやつてみようじやありませんか。三階クラブ長屋の一室、演劇部室に気軽においで下さい。我々は、あなた方のような情熱家をお待ちしております。

歴代自治会長の顔ぶれ

在位年度	氏名	卒業年次	職場（大学）
二三前	下村 按理	二四	最高裁判所
後	北村日出男	二五	朝日放送考査部
二四前	蒲田 幸夫	二五	
後	藤木 忠	二六	（関学大）
二五前	藤山 健持	二七	住友化学（東大理一）
後	倉西 博之	二七	東住吉高校（東大文二）
二六前	嘉悦 勲	二八	（京大医）
後	今井 豊	二八	（京大法）
二七前	浅野信二郎	二九	（東大文一）
後	奥村 啓二	二九	日清紡ＫＫ（東大文一）
二八前	蒲田 雄輔	二九	東洋綿花（和歌山大）
後	高橋 仁志	三〇	（甲南大）
二九前	清水 紳	三一	近畿日本ツーリスト（関学大）
後	道場 明嘉	三一	道場鉄工所
三〇前	藤田駿一郎	三二	家業
後	大西トミ子	三二	（同志社女大）
三一前	久松 義典	三三	（和歌山大経）
後	福島 央恵	三三	（市大家政）
三二前	渡辺 茂樹	三三	
後	佐々見輝蔵	三四	（阪大工）
三三前	納庄 俊輔	三五	（中央大）
後	横田 捷宏	三五	（東大文一）
三四前	鎌田 明彦	三六	
後	西 忍	三六	
三五前	関 秀生	三七	
後	三好 健司	現三年	
三六前	砂田 良一	現三年	
後	堀内 孝修	現三年	
三七前	小畑 精武	現二年	
後	金田 博志	現二年	

○誌上ペンネームを使用しましたが次の通りです

○三三ページ「詩」哀怒喜楽＝青木英和

○七四ページ「黒犬だけが知っていた」津生志質造＝下貞孟・山上憲一・中条晴美・滝本勇臣・吉田道雄・平井義丸・山本春樹

○七七ページ「珍・女の一生」小路実＝北村実彬

○七九ページ「寂」高光眞＝河内正明

○八十ページ「無責任航海記」伊加太＝水島竜彦・北村実彬・平井義丸・上田恵子

○八三ページ「Aの日記から見る」吉村正＝金田博志

編集後記

○まず最初に期日の都合で募集の日数が少なかった事をお詫びします。

○先号には文化系クラブ・一般投稿を中心にしたとありましたが、今号ではクラブを一般に組み入れてできるだけおもしろく読めるようにしました。今回は広告を省かせていただきました。

○今度のスプリングでは年内に発行しようと編集委員の野郎（失礼ー）の張り切りよう。それに[illegible]なのが化学研究室の諸先生方、授業が終れば代々がすつ飛んでいつて机を占領。本を拘えて帰つて来た先生方は又早々退散。お寒いのに御苦労さん（化研にはね…。ストーブがね…。）それに毎日毎日印刷屋へ夜討ちをかけて、印刷屋さん御苦労さん。

○先輩を訪ねるはずのある記者曰く「ＮＨＫの下重アナウンサーは猫に似ているね」下重さんゴメンナサイ

○板東夫妻を訪問した者曰く「あてられちやつた」

○今度の一般投稿はコミックなものが流行しているが、津生志質造（つぶし　しちぞう）等は全くふざけたものであろう。ある編集委員がいうこの名のいわれは、七人の人間で「むちやくちやのつぶし」を書いたところから来た、そうである。